椿山荘

志かも、その花の美くしくて、散ることの脆きは椿のみかは、瓦となりて全からむよりは、寧そ玉の砕くるに若かずとて、椿山荘は侯爵山縣大將の、世を隔てたる村荘なり、梅櫻今年も春を粧へども、主人の君は露西亞の都に使して、花には背き給ふれど、家守の翁の樹を養ふに志厚く、朝な夕なに橐駝師を指揮して、彼の木をいたはれよ、この草に培へよと、注意疎かならざれば、庭には苔面白う生へて、見るに一段の趣を添へ、打水に箒の痕を殘して、波の形を地に印するも興あり、今茲三月廿九日大岡硯海君と共に、この園に遊びて、汚れたる塵胸を洗ひたる、その日の事ども、おぼろ氣に書いつけ見るに、先づ目白臺の表門より入りて、植込みを行けば、眞額に松の木の古きがあり

て、道は左右に別れたり、母屋は洋風の建築なれど、目障りにもならず、松樹の下には古き水雷管を据へて、水ある樣を見せ、その傍に唐銅の擬寶珠を置けり、こは浪花京橋のものにて、慶安二年に鑄たるなり、小道を入りて、中庭に至れば、高からぬ小山の屈曲して、裙は二つに別れ、麓は開けて、遠く田の面を露はしぬ、家は廣く、樣は高く、沓脫の石を踏みて、椽端に腰掛けつゝも、四邊の景をうち見やるに、近きに熊笹生ひ茂りて、庭の隅を彩り、一村の竹叢に、日の光の射し入りて、葉影の白く紫色に見ゆるなど、油繪を正の物にて見る心地す、松あり、枝古りて、龍の蟠れるが如く、雲を獲て、池中を出づる姿あれども、家の楹には廂となりて、日を除け、夏は風を起すべし、松の下に綠色なせる、石の唐獅子あり、彫と云ひ、古色と云ひ、數百年前のものなり、こは先頃 辱くも 今上皇帝より下し賜はりたるも

のなりと、芝草を踏み、徑路を下りて、池の汀にいたれば、水にも石にも錆つきて、天工の趣あり、池は裙開けて、岸には熊笹生ひ茂れり石橋あり、枯れたる蘆あり、白鷺の立てる無きは憾みなれども、朽たる舟の枯木立に維ぎありて、人の手を入れざるに風情あるべし、徑路を上りて、四阿のある處に出で、對山を望むに、池も見えず、谷も見えずなりて、たゞ松風の音するのみ、雜木に松の交りては、山櫻の處斑に咲き匂ふなど、庭の中とは思はれず、四阿に腰うちかけて、案内する男に由來など問へば、亭は悉く西南戰爭の時、薩摩より持來れる材木にて造り、例へば田原坂、植木邊の木に、彈丸の痕の殘れるを、わざと紀念に用ひしなりと、なほ行きて、過ぎ來し方を顧向けば、山も隱れ、木も低うなりて、見るから平庭の如し、古松あり、木振は自然に任せたり、案内する男はいふ、これを俗に天狗松と云ひ、

この枝を作り、この木を削るもの、祟りありと云ひ傳へて、豪毉師の一人として、手を入るゝ者なく、今も年々新しき注連繩を張りて、神の意を鎭むるとぞ、實に亭々たる松、風度りて吼るかと怪しまれ、木精も動ぎ出でんばかりに思はる、松の樹の間よりさし覗けば、關口の水を隔てゝ、早稻田を一目に見渡す、大隈伯の庭園も、此方より見れば手もて弄ぶべし、空は靑く、枯田の畔に若草摘む妹子の、帶の色も見え渡り、鳥の長閑に飛びて、煙らぬ柳に隱るゝ樣も春なれや、また熊笹を別けて、池の汀に下る、春の水、饒にめぐりて、その色靑く、空の雲を呑み、鳶の舞ふ影をも映して、見るに目も覺めぬべし、なほ行く、雉子の人の氣合に驚きて、飛び立つさま、畵も及び難く、案内する男のいふ、朝はいつも鴨の五六羽來りて、水に化粧するも七八時頃にいたりて、母屋の雨戶繰明くる折には、何處行くにや、飛び

て居らずなるが常なりとぞ。なほ行く、山の形、陰に迫りて、深山路を辿るが如く、やがて乞食谷に出づ、竹の一村に、杉の木立を交へて、幽邃辭にも述べ難し。細き流れあり、水瑠璃の如く清く、如何なる炎天にも涸れずとぞ、水は日によりて清く、竹は水を裏みて趣を添へり。坂を下れば、瀧あり、小暗き方に白う見え、裾は流れになりて、山の麓を繞るなど、作れるものとは思はれず、杉の木立を屏風にして、日あたりの好き處に、笠を伏せる如き小山あり、奈良の若草山の俤ありて、土佐の筆を假らば、如何に風情あるべきか、この邊一帶を俗に乞食谷といへり、この谷の下に鑛泉あり、石を疊みて、井の上に制札を立てたり、一株の梅を添えたるは、江南の一枝に擬したりや。青き小山に梅の一株、その取合せの面白き、主人の心意氣も思ひやられぬ、鑛泉の傍に風雅なる湯殿あり、福德館といへる、分捕品の扁額を

掲げぬ、こゝを出づれば、裏門より、また折れて竹林の中に入る、荒れたる畠あり、枯木立あり、馬場あり、射的あり、行きて四阿のある處に出づ、この亭は、悪く小笠原島産の木材もて造れりと、櫻の木の間に富士見え、木立の中に專門學校見ゆ、山を繞り、麓に出づれば、田中宮內次官の芭蕉庵見ゆ、清楚掬すべし、江戸川の水白く、櫻の未だ蕾なるもよく、行き行きて、路の程一里あまりにもなれりやと問へば、案內する男はいふ、左なり二里に近かるべし、大將毎朝必ず一回はこの庭を一周し給ふとぞ、なほ行くに田あり、深ふして底無しといふ、こは中段に埋木して、餅の米を作るに、一俵餘も出づべしと、行き過ぐれば、茶畠あり、蓮池あり、その邊に菖蒲あり、花の頃はさぞと思ひやられぬ。漸うにして裏門に出づ、こゝにて案內する男に別れ、謝して門外に出づれば、江戸川麓を流れ、駒塚橋書の

如くにて、野外の風光一入よし、終に隣家の芭蕉庵を叩きて、主人田中次官に面謁し、こゝにて厚き待遇を受け、半日の清興、飽くまで煙霞を貪りて家に歸りぬ。

芭蕉庵

江戸川の上流を溯りて、關口の邊に至れば、川巾狹うなり行きて、兩岸の崖高く、木立森々と生ひ茂りて、晝もなほ小暗し、若葉の頃は別けて眺め美くしく、夜は杜鵑の啼き過ぐるなど、都の中と思はれぬまで物寂たり、關口を過ぎて駒塚橋に出づれば、見る目も廣うなり行き、高田、早稻田の眺望、一眸の中に落て、その景の面白き、辭にも述べ盡されず。この畫中に在る芭蕉庵は、今の宮内次官田中子爵の本

邸なり。古松は門の廂となりて、月に婆娑たる影を映せば、入口には苔蒸せる石碑の、離々たる草に交れるあり、玄關に小さき鐘ありて、訪ふ者に便にし、庭には疎なる垣根結びて見る人の見るに任せたり。林泉晝靜にして、鳥も聲無く、石の徑に人無くして、池に魚の曜るも見られぬ、主人と共に庭内を徂徠すれば、古池に土橋あり、觀音の像あり、木下闇の道を上れば、早稻田の春色は、一段〳〵に見え渡りて、畔に若草を摘める女子、野に枯草を擔ひ行く男の、高田邊に急ぐも見ゆ、山上に芭蕉庵あり、古松檜に横はりて、常に颯々の聲を送り、眼下を流る一帶の清光、白き練絹を曳くかと見えて、その美くしさ筆にも寫し難し、江戸名所圖會に、庵の前には上水の流れ横はり、南に早稻田の耕田を望み、西に芙蓉の白峯を顧みる、東は堰口にして、水音冷々として禪心を澄しめ、後には目白の臺聳へたり、月の夕、雪の

朝の風光も亦備れり、昔時上水開發の頃、芭蕉翁此地に遊ばれしにより、後世その舊跡を失はん事を歎き、白兎園宗瑞及び馬光などいへる俳師、この地の光景瀨田の義仲寺に髣髴たるをもて、「五月雨に隱れぬものよ瀨田の橋」といへる翁の短冊を塚に築き、五月雨塚と號すとあり。以てその勝概を知るべし。田中子爵の此の地に居を卜せしは、さいつ年子爵の警視總監たりし時、山縣侯の統理大臣の冠をかけて、椿山に隱れ住み給ふと共に、その職を辭して、こゝの荒れたるを繕ひ、さては多年の風月を、此所に送られけるとぞ、われのこの庭を見たるは三月廿九日なれば、花は盛にして、四方の眺望もいとゆたかなりけるまゝ、主人の饗應にあまへて、半日の風流、塵中の人にあらざるを覺えたりき。

多聞山莊

秋の景色は一霜毎に寂びて、こゝに茶人の楓林の晩を賞するには、至極嬉しい時候になつた。早稻田の多聞山莊に世を遁れて、半月庵巳翁と名乘らるゝは、前の陸軍省醫務局長軍醫總監男爵石黑忠悳先生である、所謂功成り身退くの格で、この山莊に隱れ、白眼看他世上人と、澄まし込まれたる大智識、女氣も無い無垢の道場は、實に深く茶道三昧に入りたる、詫住居である。予の水哉兄と共に招がれて、その山莊に遊んだのは、霜月十五日の午後一時、しかも空よく晴れて、天高く、氣澄み、鳥の遠く飛んで、音羽最寄の雲に入る態など、頗る心地快い日であつた、先づ大隈伯の邸を右に眺め、寶泉寺といふ寺の前を左に折れて、小山に通ふ細徑を進めば、杉の一むら晝も小暗き處に出た、

其處に杉の生垣があつて、その奥に小かなる庵がある、入口が二疊、待合が三疊、床に蒲生氏郷の一軸を懸けて、寒椿の一輪を生けた具合、先づ俗人の肝を冷した、苔に黒んだ庭石を、竹の皮草履に踏んで、前苑に出で、一寸眺望を賞して、さて手水鉢の水に、口を嗽ぎ、手を清めて、四疊半の茶室に入る、床の間の一軸は、定家卿の書簡を、小堀遠州の好みで、質素な絹表具を施したもの、たゞ天地にのみ古錦繍の逸品を用ひし塩梅、流石に溢い好みである、古青磁の花瓶に、緋牡丹の一輪挿しで、三尺の違ひ棚は、半ば押入になつてゐて、その上に玉嵌めの唐物の臺に、宋製雲堂の陶の香爐が載せてある、蓋は黒檀白檀磨きの珍物、爐の傍に低い衝立のあるばかり、外に裝飾は更に無い、主人の翁は爐に炭をくべ、時節がら散紅葉の摸様ある蘆屋釜をかけて、そして我等を導いて、庭前に逍遙を試みた。庭は一面の芝草、黄ばみ

果てゝ氈を敷き詰めたかの樣であつて、處々に手頃のベンチが据えてある、三抱へもあらうと思ふ老松が二株、風に千秋の聲を送つて、颯々たる梢の下に立たれたる翁、その儘の蓬萊山の圖だ、青木に交る楓葉は、幾夜の霜に色を凝らして、二月の花よりも紅なれば、早稻田の田甫の狐色に見ゆる具合、彩色の配合頗る妙である、右に隣する穴八幡、左は水稻荷の社から、淺間神社の摸造富士をかけて、守宮が池の名所を我物顔に見上げ見下ろし、前は天地開けて、近きは大隈伯の邸より、遠きは山縣侯の庭苑を合せて、傳通院の杜に續く一丘、麓には千家萬屋の瓦屋根、波の寄するやうに見えて、月の出汐の眺望、思ひやられます。時に主人は微笑一番して、僕の山莊で誇るに足るべきものは、この庭中に宗艮親王陣營の舊趾と、藤原秀鄕建立の多聞天の堂趾と、守宮が池と云ふ舊蹟があることだ、親王は後醍醐天皇第三の

皇子にまして、世に信濃の宮と申奉る御方、後村上帝の正平七年新田家が親王に供奉して、足利直義と武藏野合戰のあつた時、この處に陣營を据えられ、御鎧を脱ぎて傍の櫻にかけ給ふたと申すことだ、太平の世の中であつたなら、草深き武藏野の裾に、露と添寢も遊ばさざりし、竹の園生の御方さへも、馴れさせられぬ弓箭に身を任せられて、夜の衾も穩かならざりし當時を思ひやり奉れば、我々がこの聖代に生れて、無事に殘年を靜かに送くることの有難さよ。親王の御歌に「おもひきや手もふれざりし梓弓起臥我身なれんものとは」と宣ひたる御心事、察し奉るも恐れ多く、またその折の御歌に「君の爲世の爲何かをしからんすてゝかひある命なりせば」とあるを見ても、南朝の御方々の、雄々しくましましたる、御心の程ぞ察しられる、また藤原秀郷建立の毘沙門堂は、四十八年前まで此所に在て、彼の青山火事といふ大火、青山から燃出して四谷牛込から目白まで燒き掃ふた時に類燒した、幸ひに毘沙門の像は、災を免れて、今も此の下の寶泉寺に安置されてある、其堂の礎石が其所の手水鉢の前にある四角な石だ、此の山莊を多聞と名けたのは夫が爲である。松は最う一本あつたが、五六年前の雪で折れた。當時此邊は時鳥が能く聞かれたが、近來下に學校が出來たり、追々近所が開けた爲に聞かれなくなつた。然れども舊式の機織る聲が、毎日聞ゆるは、田舍ならねば望み難い所である。守宮が池と云ふは、由來は知らぬが江戸名所圖繪にも書いてある、此邊も名所の一である。主人が斯く語りつゞけらるゝ折しも、釜の湯の沸ぎる音が松風のやうに聞ゆるので、主人は我々を伴ひて、また茶室に入られた。同席五人が一席で、先づ會席の膳に、吸物が木蠟の薄鹽、取肴は廣島の干香魚と、渡島の煎海丹とである。みな凝りに凝つたもの、

一獻過ごして、膳を引き、手製の蒸菓子で口を甘くし、それから濃茶の呑み廻しとなつた。茶の銘は「青葉の白」と云つて、遠州の好んだ一品物を、宇治からわざ〳〵取寄せたのである、その茶碗は高麗の筆洗、そして煤竹で編んだ支那製の炭籠が珍らしいから由來を聞くに、主人が日清戰爭の折、野戰衛生長官として、朝鮮の平壤から、清國九連城より安東縣の邊りを巡廻した、時しも山縣大將が微恙あつて陣中に臥せり居られたを見舞つたところ、枕元にあるのがそれ、それを宿の主父に談じたが、何か代の品を呉れといふから、鞄の中に持ち合した茶器を遣つたところ、喜んでこれを贈つたのである、その時大將は主人の見舞つたのを非常に喜ばれて、秘藏の干魚を折半して、一片つゝを珍重して賞味した事があつたが、これが陣中第一の贅澤であつたよ、人間その折の心さへ忘れねば、一生大した過失は無からふかと思ふと、また高笑一番して、茶席を撤した。この時夕陽は西に傾いて、紅葉の夕榮へ、一入に眺望の美くしい頃、來合せられたる奥樣をも暫時庭先に起つて貰ふて、四五枚の寫眞を撮り、今度は主人に送られて庭の中を過ぎ、來し方とは全く反對の出口より表門に出で、暇を告げて、山莊を辭し去つた。また一歩一歩俗界に近づいて、本町の帳場格子に、丁稚や番頭のがや〳〵する中で、左に算盤、右に禿筆を執つて、半日の閑遊を記した。知らず今夜の夢は、洋服の上に茶色の被布など着て、枯野を駈け廻る所でも見るであらうか。

深秀園

安田家の資産から云へば、千兩箱を赤煉瓦の代に積み重ねて、宏壯な

る西洋館も成らうし、大判を敷石にし、小粒を小砂利に敷き詰めても、庭園を飾ることが出來やうものを、實際その家に就いて、その家庭の有樣を見ると奢侈といふものは、微塵も認め得ることは出來ないのである。大川の邊に巍然として建てる西洋館は、少しも輕浮な粧飾が無くて、たゞ堅牢を旨としたるものらしく、大門を入り、黑き小門を入りて、玄關にかゝれば、煤塗の格子戶が、雜巾の目の目立つまで奇麗に拭つてあつて、何處となく古風な點が見える。應接所の前から、奥座敷に行く、上段と二の間との二間に分れて、平家造ではあるが、品の好い構造の中の口から伊豆石の敷石を渡つて、庭園に出れば、右手に大なる池がある、綠樹重陰の下に小門があつて、中二階から、中庭から、茶座敷の方へ通ふ一路がある、その徑を便りて池の緣を辿つて行くと、また小門があつて茶座敷がある、僕は松風の音の聞きやう

も知らず、茶の手前も知らぬ野暮漢だから、素通りにして、大なる椎の木の下より、山の手にかゝり、笹籔を越して、鏡のやうな池の面を見ると、洋館も中二階も、影は悉く水に落ちて、野渡あらねども、孤松の下に舟自ら横はりある。山の上の四阿は、青き木立の中に交つて、夏ならば風の清かるべく、秋もなほ氣爽かにして、仙境の想ひがする。だら〳〵と路を下りれば、徑が三方にも四方にも岐れて、右を指せば、中の島に行ける。途には松に楓に枝を交へて、鳥の聲も長閑に聞こえ、島には小やかなる石橋が渡してあつて、巖石と青草の丘とが、如何にも自然に出來てゐて、古松五六株と、古びれた鐵の祠とがあり、池の汀に、一双の白鶴がゐる、予はこの處に三郎彦と小六郎といふ二人の兄弟を立せて、蓬萊山に擬した印畫を作つた。唯憾むその尉と姥が、安田翁夫婦で無かつたのを。

秋立つや身輕に見ゆる鶴の脛

また元の路に立戻り、池をめぐりて、朱塗の華表のある處に出た、二抱へも、三抱へもあらうといふ古松林立の下に、朱の祠のある躰は、近江八景ならば、唐崎の夜雨と云ひたい程だ。その玉垣を出でゝ。尚ほ松の樹間から、清き池を見渡しながら浮見堂に似た草堂の前に出ると、此處も堅田の俤がある。そこから離れ家の前を通り、また池の端へ出て、石橋のある處に出た、橋の上に立つて、全景を見ると、近江八景とは好い見立かと思ふ。勿論當らぬも八景だから、不妥ならば予の一家言とお見遁を願いたい、予は庭園を一周して、また廣間の前に立つて、安田翁を寫眞し、室内を撮影して後、翁の談話に耳を傾くること少時、その家庭の圓滿なること、子女敎養の周到なること、そして令夫人の、本を守り、昔を忘れずして、質素勤儉を旨とせらるゝこと等を聞き知り、一層翁夫婦の高風を欽慕するの念を高めた、勤儉は人の美德、この二字、大にしては國を興し、少にしては家を富ましむるの基である、古往今來國家の衰ふるは、多くは國費增進の四字にあることを思へば、吾も人も寒心すべきは、奢侈の一事である、而して翁の質素と勤勉との美德、これを何に譬へんか、嗚呼先生の高風山高く水長し、加ふるに翁還曆の高壽、これは一入目出度い儀に御座る。句あり、錄す。

菊咲いて壽盃を水に泛べたり

葵坂の大邸

江戸の俤をその儘に、こゝ葵坂に一搆への大名屋敷がある、門も昔の

通りであれば、入口の小砂利までが、土一升に金一升の東京には、勿躰ないまでの廣々した鹽梅は、流石に明治の豪商大倉喜八郎君の住居である、主人の君は今年六十二、所謂還暦の祝を兼ね、婦人德子と廿五年の銀婚の祝儀を擧げんとて、時は若葉の夏のはじめ、新暦でいふ五月の廿三日から三日の間天下の紳士紳商を招待して、園遊會を開かれた、午後一時からとの振込みに、東より西より馬車を驅つて、集まり來る人の波、先づ大門を入つて、玄關には主人夫婦が待受けて、まアお二階へと人して案内さするに、階段を登れば、こゝには印度支那などの古代の佛像が、處狹きまで並べてあつて、天井も襖も金ピカの、土足では勿躰ない位である、それから階下の廣間に入れば、諸方からの祝ひの品が、段々に積み重ねてあつて、金銀珠玉の蓬萊山、錦繍純子の松竹梅、さては鶴龜、マッタ日の出の二見浦、咸な名工が工夫を

凝した贈物で、堆きまで積んである、椽側を傳ひ離亭に行けば、主人夫婦の壽像が、銀屏風の前に飾つてあつて、その三人の像は大倉組の社員一同が、君の多福を祝つて贈つたので、海野美盛君の彫製になつたもの、大倉君と夫人との像ばかりでも、二十貫目の銀を費したと云ひます、それからまた椽側を傳ふて、長廊下の出口に來た、こゝには高等接待員といふが居て、燕尾服の襟元に銀製の鶴の徽章をつけた紳士が、彼方へと案内する、だら〳〵の長廊下を傳ふて、高等棧敷の入口に行けば、接待員が五歩に一名、十歩に一人といふやうな鹽梅に、多勢居て、心切に鄭重に案内する、漸々廣場に下りて、長廊下の有樣を見ると、廻廊を三段に架して、中央の踊舞臺が何處からも見ゆるやうにしてある、廊下には上から下まで、紅白の幔幕を張つて、その前に幾脚とも無い、純子張の

椅子が据へてある、さて舞臺は破風造りの、優美な造作で、純子の純帳が下つてある、廣場は一面の芝草で、天鵞絨の氈でも敷いたやうであれば、彼方の丘には酒店があつて、お好みの銘酒が湧くやうにあり、茶屋女は新柳二橋と吉原向島までの大小の藝者でお酌をする、會食の廊下は、幔幕を垂れて、時の來らぬを示し、粟餅の曲搗は、來賓一同の腹をよらした、てんぷら屋の店には、喜樂の女將が腕を見せ、そば屋の奥には花屋のお神が愛嬌を振撒くめり、其外長谷川の女將と、瓢屋のお神と、いづれも一人當千の豪の者の顔揃ひで、手ぐすね引いて、客來を待構へてある、また機橋を攀ぢ登りて、西洋館の二階に入れば、東京は一面のパノラマ、愛宕の塔が若葉に裏まれ、品川の海は白帆を呑んで、臺場の霞に隱れる樣も妙なれば、千瓦萬屋、日に蒸されてか、八百八町はたゞ繪のやうである、欄干には椅子が並んであつ

て、腰を懸れば、先づお一つと、新橋の姐さんが麥酒をさし出す、お壽司は如何、西洋菓子は如何、水菓子は如何と、諸事ツツとして居て用の辨ずる極樂世界、こんな事が百年も續けば好いがとは、地震を怖がる官員樣の御託宣であつた。斯して一時も過ぎ、二時も過ぎた、これからが餘興だといふ、接待員の注意に、我劣らず設けの高等機敷に着けば、順て純子の純帳が、キリ〳〵と卷き上つて大倉君夫婦が舞臺に現はれた、底で今日この會を催したところ、何の風情の無いにも係はらず、斯く賑々しく御來臨あつたことを謝して引下ると、引續いて石黒男爵と澁澤君の令息篤二君とが、舞臺に現はれて、大倉君が還曆の祝儀と、銀婚の慶式との紀念に、金五拾萬圓を投じて、一の商業學校を私設せらるゝことを演說された、拍手喝采の聲が暫時も鳴を止めざる中に、槇本子爵が來賓總代として、それに應ふるの祝辭を述べて

引下れば、忽ち嘹喨たる音樂の聲が起つて、地下より神仙でも湧き出しさうになる。頓て二時半にもなつた、ハアポン〳〵の囃子の音が聞えて、カチ〳〵の拍子木に奴道成寺の幕が明いた、それが濟むと、次は操三番で、龜藏と家橘とが、一トわたり舞ひ終つて、樂屋に退くと、菊五郎の三番叟が操姿で、舞臺に平伏する、ドヾ滑聲の身振ありて、舞ひ納むれば、見物はヤンヤと賞め立てる、この間例の如く奏樂あつて、また幕が明けば、新曲銀婚式の踊である、こゝに雌雄の鶴を養ふ榮三郎と家橘との尉と姥とがあつて、諸事お目出度く舞ひ納むれば、清元連中の唄につれて、新橋選り抜の大小の藝者が、揃ひの衣裳で鶴の舞を演ずる、その姿の優しき、天女の舞も斯くやあらんと、英雄もこの時ばかりは、眼の据所が違つたやうであつた、兎角する中には四時半にもなる、空は一天拭ふが如く晴れ渡つて、夕陽松を照り反へす

樣の美くしき、黒裝束の紳士の傍には、鼠縮緬の奥樣の配色が面白く、シルクハットのお隣には、ポンチ〳〵ツトの貴婦人が、御亭主の腕につかまつて、浮氣を豫防して御座あります、さて第一日に入らせられた貴顯紳士華族豪商の方々を誰ぞと見奉れば、伊藤侯爵は大隈伯と、離亭に碁を圍んで、群小を一睨せらるゝ所天下の英雄はたゞ夫れ君と我のみだと、世間構はぬ大きさには、流石に大政治家の度量が見えた、其外内閣の各大臣、各國の公使、公侯伯子男爵の華族方、綺羅星の如くに居並びて、各々廣場の卓子に對ひ仨々伍々隊を組んで、高樓傾け盡すシヤンパンの酒、天下の英雄眼中に在りと洒落給ふ紳士があれば、貴女まア何うなすつて、酷いお見限りです子と、豪傑を子供扱ひにする女將もある、總じて今日は無禮講、人は十分に醉ひ、十二分の歡を盡して、家路に着いたのもあつたが、それよりして伊藤侯爵には、階

上に陣を立て直して、こゝに一場の長演説を試みられ、榎本子爵も同じく踏み留まり給ひ、夜の八時頃に始めて全く散會を告げた、こは第一日の景況である、偖其翌日も翌々日も斯くすること、三日三夜に及び、費す所の經費は五萬圓とぞ聞えし、我はその三日の間、所謂高等接待員てふ名目の下に、當日の寫眞をも撮影した事であるから、一言園遊會の記を述べたのである、大倉君、君は越後新發田の人、十七八歳の頃、單身東都に出で、赤手業を創め、千辛萬難の末、今は巨萬の富を得て、陶朱紀文を願使する位の身代、しかもその富に驕らず、その勢に馴れず、產を割いて學校を興し、金を散じて人才を養ふ、君の如きは實に日本富豪の雛形であつて、能く溜め能く散ずる人といふべしだ、めでたし〳〵。

春の風

「子供等の成長見たし春の風」とは、誰やらの俳句に見えたるが、實に松竹渡したる大路の樣も、何となふうち霞みて、うら〳〵かに澄む空の色、人の心も舊臘とは表、裏白譲り葉をかけて、春はこゝより洩れ初めむ門の戸の、明け放ちたる中に、振の袂を飜へして、一子二子と羽子つく娘の、頬の豐さ、愛らしさ、惠方は此處か、福の神はこの棟に在まさむ、國旗はヒラ〳〵、屠蘇の醉に地球は一轉して、あア何處も彼處も面白の顔と、面赤の顔、我も聊か母なる人に世話焼かして、春衣の丈を量らせし頃を憶ひ出して、昔の初夢を語りて見むか。元日の晨に鶯の聲を聞き、暮の內から臘梅を見らるゝ土地に住む人はいざ知らず、我が故郷の宿は浮世に遠く山近く、不時の吹雪を檐端

に眺めて、氷柱の中に春を迎ふることなれば、風も冷たく、爪も膚ら
ず、たゞ正月とて工作の業を休み、臼には注連を張りて、燈明を供へ、
鋤は磨き立てゝ、いざ鎌鍬といふ時の用意に飾り、かるた双六の遊び
を、無上の樂しみとしたりしが、われ十四の春、旅の空に苦學する身
となれる一月、年男に撰まれて、朝な〳〵若水汲む役とはなりぬ、桶
には注連を張り渡して不淨を退け、柄杓には紅白の水引かけて、元日
のいたるを待つ、東天やゝ白みて、一陽ほの〳〵と來り明くれば、淨
め置きたる桶を提げて、辻ある川の邊に行き、七五三と數とりて汲む、
斯くすること、凡そ七日あまり、水、桶に滿つる時、蓋して秘め置き、
戊の辰の日、屋の上にそゝぎかくれば、火難を免るゝとなり。この年
男の報酬僅に錢五百文、さりとては廉なる業ならずや。それより七年
が程も過ぎ行ける正月、われ東京に在りて、やゝ自活の業を得たる時、

未だ多く世に交らぬ身の、朝の中に年始を濟まし、元日の晝過ぐる頃
より、赤馬車にて上總千葉に赴きぬ、晴衣にモーニングコ
ートを製りたれど、俄紳士の外套までは無く、襯衣も綿チルなれば、
わづかに暖をとり得るのみ、市河を渡り、舟橋を過ぐる頃、日は暮れ
たり、月はあらず、春とは名のみの寒風、夜の更くるにつれて烈しく、
身を殺がるゝ程寒ければ、齒を切みみ、肩を聳かして、我慢すれど仕切
れず、石高道に車の輪の觸るゝたびに、右に左に體を揉まれて、脊骨
を窓にうちつけらるゝ痛さ、錐もて刻まるゝかとも思はれ、震ふ齒の
根を合せんとすれど、輾轉動搖、口我から開く、終に寒に堪え得ず、
海布の如くなれる駄者の、赤毛布をかけて、頸と肩とに堅く巻きつけ、
漸く凍死を免れたり。その翌年の暮より、雪の故郷に歸りて、春を陸
奥に送れることあり、風寒く、雪深けれども、わが家近くの町に芝居

ありたり、徒然を慰めんとて見に行く、臺辭まはしの不思議なるは猿芝居にも劣りぬ。この日の外題は山莊太夫なり。「柴も樵つたり、鹽も汲んだり」とあるべきを、「柴も汲んだり、鹽も樵つたり」と云ひて、眞面目なるが如く、それよりも未だ可笑しきは、「向ふに見える人の足音」と云へるに、流石のわれも失笑したりき。四五日經て、われ小松村なる江口家に招がる。しかも雪深くして、家の棟を埋めたり、この夜小作の農夫どもも、圍爐裡をとり巻きて、狂句合をなしぬ、大雪といふ題なり、われの附木の端に書いつけて出せる句に、「大雪にまた豐年の前祝ひ」とせしもの、壓巻となりて、一座を笑はせしことあり。翌年の正月は、京都に旅して、三條小橋に宿りぬ。山紫水明の地、雪に一入の趣を添えたり、この頃や東本願寺の門跡逝れさせ給ひて、全國の僧尼、東に西に馳せ參ずる時とて、此地の繁昌一方ならず、われそ

の中に髪を短に苅り立て、黒き羽織を着たるは宛然沙彌の姿ありとぞ、一夕漣子と鴨東の萬亭に飲む、われを目して「六條さむか」と問ふ、われは「否三條小橋なり」といふに、仲居は腹を抱へて「それでは御身はお上りさんか」と笑ひこける、更にその故を知らず、家に歸りてこれを問へば、何ぞ圖らむ、六條とは西本願寺の轉語にて、乃ちわれを門徒坊主と誤認たるなり、知らずしてわれ三條小橋に在りと答へしもの、これ所謂問ふに落ずして、語るに落たる、田舍漢者の自白者なり、漣子後に此事を聞き、切齒慷慨したりしとか、去年の正月われ疾で偃臥す、しかも尚ほ筆硯を辭せざりし、知らず今年の今日、われ如何にしてこの樂しき新年を迎へんや、試に先づ白梅一枝を折て、一番の春風に吉凶を卜せんか。

長柄山の夜雨

想ひ起せば七年の昔語とはなりぬ、俄に思立てる事ありて、寺崎廣業氏が湯島の宿を立出でたるは、一月二日の正午なり、都大路は注連繩引き渡して、松竹飾れる門に、娘子供の羽子つく音の勇ましく、禮者の腕車の威勢よきも、他所に見すてゝ、兩國橋まで急ぐ、こゝより千葉通ひの馬車にうち乘りて、市河の渡を舟にて越す、鴻の臺より眞間の弘法寺を見めぐり、蘆に下りて、手古那の社に詣づ、こゝに繼橋の古跡あり、その根に年古る石碑立てり、元祿九年に建つるものにして、文に「繼絶興廢、維文維揚、詞林千歳、萬葉不凋」とあるも嬉しく、それよりして一帶の松風、利根川の緑につゞくも美くしきに、野は冬枯の景色ながら、一夜明けての何となう春めけるも興あるまゝ、うかうかと時刻を過して、また馬車にうち乘り、舟橋、撿見川を越し、夜に入りて千葉に着く、加納屋といふに泊りて、酒に暖をとりて臥しぬ。翌朝は早くより車を飛して、茂原町に行き見しに、思ひしほどにはよき町ならで、見るべき景色もなく、樂しむべき風物だにあらず、我は肝癪を起して、その次の夜の明るを待ち兼ね、東京に歸らんとす、土地の人など頻りに我をなだめて、その町より半里ばかりも距ちたる、武田某の家に伴ひぬ、こゝは縣下に名だたる豪農なれば、珍らしき書畫もあり、盆栽なども數多くあるに、半日を送りて、主人の歡待の酒に酔ひ、止めらるゝを聞かず、その家を立出でゝ東歸の途につきぬ、秩時計だに持たぬ頃の、血氣に任せて、日は暮れかゝりたり、空は曇りて雨降らんとす、足里と歩まぬ中に、は靴摩れのして、痛さに堪えられねば、草鞋と穿かへて、そを洋杖の

先にくゝりつけ、兎角してまた半里も進みぬ、夜に入りて、雨は颯と落ち來りぬ、宿るべき家は無く、路は春泥海の如くにて、進退これ谷まりぬ、如何せむと躊躇たれど、この暗き山路を誰一人夜行くものゝあるべき、陰々たる木下の山氣、梢をなぐつて吹く風の音に、戰と身震ひして、耳を澄せば、狐の聲の遠く聞ゆめり、我は靴を半巾もて腰に結び下げ、洋杖を測量器に代へて、泥の淺さ深さなど、心あてに探ぐりつゝ、漸々にして小山を越したり、なほ行くに小村あり、堂の脇には一本の杉立てり、其處に人の氣色するにぞ、近づきて、闇より聲をかくれば、彼方も我を渡りに舟とや思ひけむ、問はるゝ此方もその長柄山に行くのなり、こゝを下らば村あるべし、共に行かむといふ、我は文無しの窮措大、追剝につかるべき資格あらぬ身の、世に怖いものは無く、安心の地に居れば、他を疑ふの心も起らで、齊しくその道を辿り、つひに長柄山村に着き、その村外れの木賃宿に、道連れの六部と共に宿りぬ。座敷といふも名ばかりの部屋に通されて、六部の男と合宿の氣輕さ、小暗き行燈の下に寐轉びて、旅の物語などす、風呂は立直しのなれど、汚きを厭ひ給はずばありといふに、さらばとて、浴するに、竈の下を焚す男あり、火吹竹もて、頻りに火を吹き煽しぬ、風呂は五右衛門とやらいふのなれば、下より漸うに、沸く心地よさに、我は掛燈の紙に、ぬるければ竹、あつければ梅、客あるを松抔冗書せる、田舍にも風雅はあるものよと、獨り興に入りつゝ、火を焚く男と、一ッ二ッ談話などするに、彼は人力車夫にて、明朝千葉に歸るものなりといふ、我はそれ欲しき折なれば、相談は忽ち纏りて、湯を出るや飯くひ寢に就き、翌朝は未だ明けぬに、この村を立ち出でぬ、二村三村ばかり越して、天明けたり、小金ケ原を越し、濱村を過ぎて、千葉

に着きたり、こゝよりは馬車あれば、乗りて直ちに東京に歸りぬ。此夜紅葉館に開きたる硯友社の新年宴會に列なりぬ。その旅の小遣帳は左の如し、

二日(一月)

四錢	湯島より兩國迄人力車
三拾五錢	千葉まで馬車代
三錢	途中茶代
一錢四厘	市川舟賃
拾錢	加納屋茶代一人分
二拾錢	はたご二ッ
六錢二厘	酒代二人分

三日

三拾五錢	千葉より長柄山迄人力車一人分
三拾錢	同所より茂原迄同
八錢	茂原中飯一人分
四錢五厘	茶代一人分
二拾錢	はたご二ッ
三錢五厘	酒一人分
二錢	わらぢ一足
拾四錢	長柄山はたご
六錢	茶代

五日

四十錢	長柄山より千葉人力車代
五錢	濵村茶屋玉子湯代
五錢五厘	はんけち一ッ
四錢	巻煙草ばいぶ一ッ
三十五錢	千葉より馬車代

以てその質素なりしを想ふべし。

二錢	途中茶代
五錢	舟橋名物切山椒代
六錢	兩國より神田迄人力車代

花見汐干

花に幔幕をうちめぐらし、樽人形つくりて花を見たるは元祿の昔なれど、今も京の嵐山には、緋毛氈敷きて、割子提重に野外の春を樂しむもあり、江戸は古くより不風流の大寄席、花見に長刀さしたる、泥醉の武士ありて、それ拔く、それ斬ると、上野も向島も、安き心はなか

りしが、今大御代のあり難さには、喰はぬ鼠も高楊枝する侍もなく、喧嘩買ふ傳法肌の仲間者も無きかはりは、花見る人は少なうて、人見る人のみ多きはうたてや。先づ上野は櫻が岡、清水堂の彼岸咲きに始まりて、向島は三圍の鳥居、招魂社は大村の銅像を花に裏みて、千鳥が淵に散る花の吹雪を見する。さて山王の朝櫻、氷川の杜の翡翠に映りて、柳の眉の烟らねど、都は實にも錦の春なり、道灌山、大鳥の社よりかけて、花の雲は筑波の嶺に近く、菜の花王子の野を彩りて、蝶の飛ぶも長閑なり、飛鳥山は名を聞いてすら、自ら春めき、麓の掛茶屋に面髭賣る樣の、天地は繪といふものになり果ぬらんと思ふまでの麗しさ。なべての世の家庭も、花に和らぎて、大家の姫は腰元に冊かれて、浮かれ出で給へば、貧家の妹も、長唄さらひ居たる破三味線すてゝ、お花見の連に入りて遊ぶ、野郎の馬に鞭うつあれば、大森髭着

て、落花の上を轉がるもあり。さる程に人情和らぎ、家に波風立たざるよ、春の海の如しとは、それはまた汐干狩をや云ふらむ、汐干は國により處によりて差異あれど、東京は陰暦三月より四月までの間を期とす、その内尤も節は、三月三日なりといへり、只見れは品川沖は、一里餘も汐の干て、船頭多からねど、船自ら山に登り、今朝見し沖の海苔鹿朶は、海士が住む家の、垣根かと思はるゝまでになりて、若き女、老ひたる男の、打交りては、貝を拾ふさまの興ある、年中第一の樂事なるべし。歳事記に『早旦より船に乘じてはるかに沖に至る、卯の刻過より引始て、午の刻には海底陸地と變ず、こゝにおりたちて蜆蛤を拾ひ、砂中のひらめを踏み、引殘りたる淺汐に小魚を得て宴を催せり』と、句に『けふの汐品川ちかし安房上總』とはよくその實況を云ひあらはせるものかな。

目黒の秋

栗四里旨き十三里、サンリに灸を据えたるお庇陰でも無けれど、脚氣も踏み出さねば、いでやこの芋の出來秋に、近在の野遊びして、一日の興をやらむものと、廿二日の日曜をあてに、編輯局一同の總起立にて、野外に懇談會を開くの議定まる。場所は目黒、栗飯を的にして、午前九時新橋停車場で待合せる事となりぬ。その日は朝からの小雨、天氣豫報の所により雨の格で、あてにならぬは參會の時間になれど、一人として馳せ參ずる者なきに、先着の予と林齋子のみ、空を仰いで嘆息する中、雨は霧となり靄となりて、新橋を渡る姐さんの懐中に入り、馬車の馬の鼻息は、雲の岫を出づる姿あれども、上りさうも無い空摸樣に、二人は失望し落膽して、約束事の頼み難きを怨んで居たが、

待てども果てしの無い所より、斷然新橋を發足した、汽車は平民主義の並等にて我慢し、フイと飛び乘れば、中は大分込み合つて、目黒なる名々の手荷物は大小不同、犇めく音はどんから童子、はや笛が鳴つても、こんから仕方が無いと諦めて、品川まで進みたり。停車場には誰か居るだらうと、待合室に入つて搜せど、跡方も無し。そんなら此處から歩かうと、林齋子の發議に、それも宜からうと、的と共に外れさうな褌を〆め直して、御殿山に行く。春は萬朶の櫻、雲を霞と織り成して、雨の刺繍色美くしく、鳥の浮織、野草の下地、浮かるゝ人は幕張らねども、山は一面錦の几帳。されどもその花も鳥も、夏過ぎ秋風梢に入りては、人の顧る者も無く、草茫々として、路迷はんとするばかりなり。何の枝で首縊らうぞ花の山といふ句はあるが、まことこの荒涼寂寞たる光景を見なば、厭世家などが妙な氣にならう

も知れねど、幸ひ兩人とも樂天主義なれば、高笑ひで通り越し、麓の方へ案内せんとて、我先に立ちて山を下りしに、何うしたはづみで道を踏み違つたやら、脊丈より高い萱の中に迷ひ入りて、出るにも出られず、下りるにも下られず、進退維谷まつた段となる。林齋子怫然となつて、そんなら僕が先鋒しやうと先に立つて、萱を掻き分け、荊棘にズボンを引き裂かれ、蝙蝠傘を泥に塗らして、漸く一方の活路を見つけ出したかと思へば、恐ろしや、其處には川があつて下りられず、また一方を捜せども、道の形だに無し。此處好く云へば田中石松、悪く云へば狐に魅されたと云ふより外に辭なし。漸う迂回して田圃道に出でしが、見れば洋服は露に濡れて、靴は泥に塗れ居る、野に出で居る農夫の變な顔をして、二人の後姿を見るも可笑かりし。此時は雨も霽れ、風さへ出でゝ、横雲を吹き拂ひ、日の影も見ゆれば、これ

では天氣も上りさうだと、喜びながらテク〳〵と歩くに、遠樹は露に濕ひて青く、田の面は風に嘯いて、案山子の弓を搖かする、田家の景色の面白きに心を奪はれ、歩くとも、なく鐵道の踏切に來る。目黒の道はこれかと、聞くこと二度ばかり、山に植えたるを麥かと林齋子に問へば、それは米だといふ。これが米か、山に在るから麥かと思つたと、水田で無くては米の出來ぬものと心得たる我なれば、その説明を珍らしく聞き、目黒に入りて内田屋を訪ふた。誰か來て居るかと問へば、前觸ばかりで何方もといふ。愈々出し拔かれたるを知り、腹は立てども、酒に不平を遣るに若かずと、空かぬ腹に栗飯を充分詰へ、一杯一杯又一杯、献酬に時刻を移す頃、女中慌しく駈け來つて、お連さまがと不思議さうに云ふ。此方は兼て期したる事なれば、縁側に立出でゝ、植え込みの木の隙よりさし覗けば、來たわ〳〵、質軒居士が

將あたる一隊二伍十人に餘れり。いづれも一騎當千の方々なれば、飲む、語る、瀧を浴びに行く、湯に入る、こゝに平壤包圍攻撃の準備なる所に、裏手の方より浦浪子また一隊に先だちて駈け集り、これより又々總裁と參謀官の漣子と珍客渡邊子の一隊來る。水哉子の混成枝隊は、飯田町より進み、其他右翼左翼の面々殘らず集りて、いよ〳〵作戰の評議となりぬ。先づ兵粮をと催促するあれば、酒が無くては矢も楯もたまらぬと叫ぶあり。物勢拈つて十有九人、是に於て軍中妓を聘して、清將の觀月營に擬したる一事あれども、目黑一疋の猫、一軍の精銳に閉口して、勇氣も何も猫、猫の如し。酒三行にして、庭前の栗の木に攀ぢて、いが栗を墮しながら、名詮自稱自ら栗のいがで血を流す人あれば、他人の折角落したのを、下に居て濡手で栗を噛みながらモッと大きいのを落して呉れとは、骨を折つて遼東半島を呉れてやる

のと、高見の見物して、旨い味を、栗の屍骸山を成して、船橋里の戰後の有樣あり。空じき腹にも、栗飯といふものは旨きものならず、これから見ると僅か木の字と米の字の違ひあれど、廬生が夢の栗餅を炊ぐ間の方が樂しかりしならむ、何んでも物は理想の方が面白く、この栗飯も食はぬ中の珍味なりと、くり事を云ふも、あは食つた男と笑ひ給ふべからず、實に古人の金言にも、栗四里うまき芋の丸燒は、書生の夢のお目覺なるべし。閑話休題一同不動尊に詣でんと、表の方へ出づれば、百千鳥百囀づりの別嬪が、白きものをこちたく塗りて、栗飯の亡魂とも云ひさうなのが、おかけなさいませ、お寄りなさひませと、五月蠅云ふのを通りぬけんとする向側の端に、紫寒冷紗の衣を着たる女中あり、紫式部が石山寺參籠といふ見榮にて、客を引く所、太肉にして、鈿女尊に矢飛白のお召を着け

させ申したるが如し、漣子手を拍て笑ひ、これが今日の獲物ならむといふ、最高點にて可決。石壇を上り、社殿に三拜して、歸る道すがら比翼塚に立寄る。竹林の中にツンと澄したものなり、權さん、紫さん、今焉に在る、編輯來り吊ふ目黒の秋。斯う多勢の參詣では、淋しかるべき處が、陽氣過ぎて涙が出ず、午後四時內田屋を辭して、一同道を二手にとり、一は飯田町汽車に乘るもの、一は品川に出づるもの、予と林齋子と第一軍の連中十一人は皷躁して品川に向ひぬ。途中の景色また一入にて、稻のやゝ黃ばみたる、杜の木の暮雲に黑みかゝれる、鳥の我物顏に飛ぶなる、漁翁晩歸の光景など、バノラマを生の物で見る心地せり。途中の立談も、目白、目赤、目黑不動の名を論じて、目白は鳥に似通ひ、目赤は眼病に通ひ、目黑獨り繁昌して、アトの二ツの不繁昌なる、神社佛閣にも厭世と樂天とあり、昔は祐天劍を呑みたるが、今は門前に酒賣る店多くして、葷酒もやゝ山門に這入かゝり、嬌喃しき聲してお寄りなさいの語を聞くに至つては、客は祐天ならざるも、頗る劍呑なる世となりぬ。漸く品川宿に出づ、馬車一輛を買ひ切り、半日の榮花前代未聞の贅澤を盡して、新橋に着きは着いたが、ガタ〳〵搖られたる結果、一つの家が幾個にも見えて、兩行の瓦斯燈が一本五つ位になつて見えるも、一の奇觀なり、穴賢。

練馬めぐり

刹那生死、考へれば人生も敢果ないものだ、日曜一日の中に、生死流轉の品變りたるものを、斯うまでも見たことは少ない。わが家近くに御殿坂といふがある、その左は植物園、上つて右が盲啞學校、そのま

た上の、やゝ白山の方に近寄つて、ふつた石階、苔青く、山門の紅売塗に相映じて、頗る詩情を惹き易いが、本堂の後は一面の杜になつて、夜は梟の聲も凄く、晝さへ森々として、厭な氣の滅いる所である、そこは如何なる因縁のあるのか、毎年一人二人の首縊があつて、亡魂が友を呼ぶと云つて、近邊に住む者も、非常に恐がつてゐる。處が、この春も世の人が、花ぢや、鳥ぢやと云つて騒いでゐる時に、何を味氣無く思つてか、未だ年若い孕み女が、例によつてフランコ徃生をやつてゐた。その慘憺の光景は形容に辭は無い、況して胎兒が、未だ腹の中で、ビク〳〵動いてゐるのは、目もあてられぬ有様だ。僕はそれで厭な氣になつて、家に居るのは異な心になつて、玄關の仁王尊ともいふべき二人の書生と、そして車夫と金磷子といふ畫工と同行五人、例の寫眞機を肩にして、フイと家を

出た。まづ的は無いが、板橋の方へ足を向けて、氷川神社の後邊を通ると、椿の花が脆くも路もせに落ちている、土方邸や岩村邸を通り越せば、野は極彩色でもあるかのやうに眼にうつる。田圃を越して、横道に入れば、子安天神といふのがあつて、それから左すれば、笹原や竹藪がある、宍戸環氏の邸前を衝貫けて行けば、巣鴨の徃還に出た、次に板橋道を庚申塚に出で、三四町は進んだが、如何にも泥濘が深いのに閉口して、また裏道に入つた。津川上水の別れ口から、その小流を遡つて、近藤勇や土方歳三の墓のある處に出た、この邊は花を手向けやうにも、菜の花の外は無い、で、また行いて、鐵道路を過ぎて、小川の別れ口に出た、其處に筏で魚を捕つてゐる村の小兒に逢つて、この邊に名所舊蹟が無いかと問ふた、が、知らぬと首を振るのみか、怪しいものとでも思つたか、二三人バラ〳〵と遠く〳〵遁げて行く、詮

方無さにまた新宿の町に入つて、只ある蕎麥屋に飢えたる腹を盈たし、勇を皷して、乘蓮寺といふを見る、こゝには女男松に相生杉といふがある、就いて見るに、女男松は枯れて、寺の後園に相生杉ばかり殘つてある、傳へ云ふ寛保三年の夏德川何代目かの將軍家が、遊獵の折からこゝに憩はせ給ひて、この杉の名を問はせられ、相生と名を賜はりしとか、今も相生緣結びの杉と云つて、戀しき君樣を、わが色糸に結ばせ給はれと、願がけする無邪氣な娘もあるといふ、境內に閻魔堂があある、御本尊は誰の作か、目にも止めないで、宿外れまで出た、岩の坂橋といふ小さな橋があつて、その根にあるのは、世にも名高い板橋の緣切榎である、我には要無き古木ながら、獨身者の書生等が冷罵半分に、その繩張內に入つた、神官の家があつて、その緣端に三十恰好の女がゐて、線香を焚しては、我等の分を手向けて呉る、益も無い事

をすると思つてゐたが、さうされて見ると只もおられず、注連を張つてある榎の周圍を廻つて見ては、また冷に笑つて、こゝの神主樣も、定めし御緣が無くつて、今もお獨身でおでゝせうと、からかつて見る、女は流石に如才無く、いゝえ、この榎といふ木は、緣の木で御座いますから、切るにも結ぶにも奇特がありまして、それ御覽遊ばせ、奉納してある額にも、脊中合せの繪もあれば、夫婦中睦ましい圖も御座りまする、貴君方も御信心遊ばせば、標致の好い、怜悧なお嫁さんをお貰ひなさる、御信心が肝要で御座いまするとと、眞面目に說き付けられては、冷評も出來ず、五人感々服々仕つて、その前にある效能書然たる碑文を讀むと、これにも緣を切るばかりでは無く、結ぶも矢張この榎だといふやうな、廣告文があつて、その末に厭味な歌が添えてある、何處の先生の選文かと聞けば、これは東京のと力を入れて、佐々

木弘綱大先生の門弟の何某だと誇る、こゝですら東京のと冠句を付ける所を見れば、流石に東京といふ土地は豪氣なものと、我等も肩身の廣い心地がして、そこを出で、小豆澤村に入つた。俗にこの邊の總名を練馬といつて、大根の產地である、澁茶賣る掛茶屋でも、干大根を賣つてあるので、名物も買ひ、芋田樂も食べて、志村の清水坂にかゝる、坂の上に田舍風の茶屋があつて、小荷駄馬などの繫いである具合、荷車挽の手拭に汗を拭つてある鹽梅など、繪にしたい程だ、坂の下に藥師堂がある、本尊は聖德太子の御作で、左右に十二神將が立たせ給ふ。境內からは清水が湧いて、夏もなほ涼しからうか。坂の下にも二三軒の茶屋があつて、清水が沸々檐下から湧いてある。野に出れば、一面の廣ッ原で、後を振向くと、左手が龍の蟠つてゐるやうな丘になつてある、小村が諸處に桃の花や菜の花に彩られて、畤繪のやうに

交つてある、右手を見れば、土地は頗る低いと見え、霞の末も見える程遠見が利いて、一面の田である、縁には菜の花や、青麥などもあるらしく、誰が意匠に小流があつて、畦道には枯木立があつて、その間を凝したとも無く、面白い圖案が出來てある。清水坂からはもう半里も歩いたらうか、近くに沼があつて、杜もあつて、社もあつて、青空を呑んである水の面には、破れた舟も横はつてある。そこまで行くに、曲り〳〵てその道の遠さ、漸う行き着いて、また沼を横に見て、村家のある處に來た。只ある長屋の一軒に、車夫が五六人集つて、丁半でも遣つてゐたらうか、洋服打扮の我等の行つたのに驚いて、遁げる、隱れる、慌てる、恐れ入る、その醜躰は見苦しい程であつた、漸う戸田川の畔に出た、長い橋が架かつてゐて、渡れば橋錢を取る家があつて、その隣にも向にも廻漕屋がある、茶屋には川魚御料理との招牌が

あつて、田舍客も見えた、まことや今日は舊曆の三月節句、村の若者は皆な業を休んで、川原に釣をして遊んでゐる、我等もそれを見てゐたが、何うも氣が優長して面白い、川は水漫々として横に流れ、村は竹叢に包まれて、鷄犬の聲も長閑である。朽杭のある渚には、舟も維いであつて、支流には石の反橋もかゝつてゐる、片側は竹の林で、その向ふ側は桃の花と、茅出柳とで、藁屋根の檐ばかりを、村家の雛形に見せてある、羽黒堂は杜に隱れ、杜の下は畠になつてゐて、こゝにも菜の花と、青麥の色とが、野の一隅を呑んでゐる、雲雀のさゝ啼き、鶯の囀づりから、春はもう十二分に揃つてゐるので、京に歸るのを忘れてゐた、が、時は三時を過ぎて、道も四里近くは遠出した、足はやゝ草臥が見え、元氣も初めの程ではない、で、船で千住まで下らうと思つて、船頭に謀れど承知しない、止む無く一艘のタゴ舟の、川越の方から下り來るを呼び止め、五人それに乘せて貰らうて、漸う再生の思ひをしたが、考へれば賞めた話でも無い、我等が乘つてゐる板子の下は、肥料桶五十荷乃ち百樽を並べて、葛西の兄哥が、三人して、その船を繰つてゐる、四人の同行は名々繪だの、或は寫生だのと、夫々の商賣に意を傾けてゐるが、我は用無きまゝに、葛西の兄哥を相方にして、肥料の話を聞いた、兄哥のいふには、當今肥料の相場は五十荷百樽を、八町堀から積んで、川越までこの川を遡つて、往復三日路で、三人して十五兩になると話す、旨い仕事ぢやないかと云へば、この船が今日々いくらかゝるかと思ひなさるかと捻ね付ける、閉口してさて川の景色を見れば、水は弓となり、弦となつて、幾回り、いく曲りか、田を呑み、畠を呑んで、うねり〳〵と流れてゐる。岸には家あり、藪あり、柳あり、竹ありて、眺望は更に厭かぬ。小豆澤の渡場

を過ぐる頃は、日はやゝ傾いて、川風も寒くなる、一同縮み上つて、もう止しませうと云ひ出す、赤羽近くなつて、鐵橋も見え出すと、さアこゝから上げて呉れと、泣くやうに頼む、葛西の兄哥も愍然に思つたか、川口町の上から、一同を上陸さした、で、直に善光寺に參詣しての歸りがけ、二王門の前まで來ると、角兵衛獅子が三人、囃子方が一人、太皷をドン〳〵打つて、舞つてゐる、面白いこれも繪だと、見了て川口の堤に出た、夕方ながら日は未だある、村の小兒が鬼事して遊んでゐる脇を、天然痘の死人が、天窓から布團を被せられて、川原の方へ釣臺で送られる、その後から一人の患者と、母親でもあるかと思ふ女と二人、巡査に送られて、釣臺に添ふて川原に行くのを見た、患者の顔をお高祖頭巾の上から見たが、鼻や目瞼は赤く膨れて、見るも哀れな態なのを、親なればこそ附添ひても行くなれ、お役目柄の巡

査すら、消毒器を片手にして、その患者とは二三間も離れて行つた。我はそれにも氣を悪くして、急いで町に這入ると、人は皆な榻下に立つて、今の一行を見送つて居るのであらう、戸々赤い紙に馬といふ字を三つ書いて、門口に貼つてある、こゝは鐵器類の産出地とて、町も可なりに賑はひ、殊に赤羽が近いので、達摩屋が澤山ある、風俗も何處となく厭な所があるので、我等は永居せずに、川口の渡場を渡つて、赤羽に這入つた、日曜日なればにや、兵隊さんが群をなして通る、こゝも五月蠅思つて、停車場に駈込み、そこから汽車で田端まで來た。飛鳥山は春も未だ淺く、王子も客は少ないらしい。田端から動坂に出た頃は、日は全く暮れた。夏ならば入相の鐘澤の、眺望一入であらうのに。春暮れて月は無く、花も彼岸櫻ならでは、紅白粉と化粧の姿も無くつて、白山も闇、指ヶ谷町も闇の夜に、例の法華寺の横を通る時、

今朝この邊に……と思ひつけば、身も戰とする、御殿坂を下りて、わが住む庵に着けば、垣根には桃の花も散り殘つて、我等の不在を見張勝である。で、この一日の散策は、知らず幾日の疲勞を慰めたか。句が浮んだ。

櫻咲くや老婆ァ伸びする背戸の口。

柳島の萩　寺

許六の百花譜に萩はやさしき花也。さして手にとりて愛すべき姿はすくなけれど。萩といへる名目にて。人の心を動かし侍る。たとへば地下の女の。よく歌よむときゝつたへたる。なつかしさには似たりといへり、それ春の花の晴々しう陽氣なるは、譬へば美人の眠り覺めて、

鏡臺に對ふ如くなれど、秋咲く花の漸うに物淋びて、霜に咽ぶありさまは、病める女の褥抱へて寢むげなる風情あり、されば古人の心に感じ、想をつらねし詩歌連俳のたぐひすらも、秋の題の哀れげなるは、野分破芭蕉のうら悲しき事につけて、心のみいため、秋閨といふも落葉といふも、孰れか袖の露けからざらめ、墨田の花雲を織る春の彌生は、娘小兒に日傘翳して、はれ衣の摸樣、あれのこれのと華美競ひながら、竹屋の渡に鴎ぢらして幼兒が笑ひの波を湛ゆるにひきかへ、秋草に筋を曳く人、誰ぞと見れば十德姿の俳諧師ならずば、風雅の道に心を寄する人々と見え頭かたむけて句を練るさまなり、櫻茶屋に田樂燒して酒呑む人はあれど、萩寺の床几に泥醉の客なきは、こもまた物淋しさの一ッなるべし。

されば今歳春の末つがた、われ奥州に下りて、音に聞く宮城野の萩の

名ところ尋ねばやとて、其處此處とそゞろ歩きしが、それかと思ふところだになく、里人に事とへば、それは昔のことにして、今は宮城野は萩枯れて青田になり侍る、客人强て殘るおもかげをのぞみ玉はゞ、宮城野の萩摺とて絹布の服紗を市にてひさぎ侍れば、それもて都の土産にしたまへとて語りぬ、およそ世の中の開け行くにしたがひ、荊草刈られて桑田とかはるは、物の理のまぬかれぬところなれど、昔時より千古万古の名所となり、順徳院の御製内裏名所和歌百首の中にも、

「宮木のゝ萩ははよはきあさつゆをえたなからふく秋の風かな」とあり、代々の御題にかぞへられ、今もなほ古昔ながらの秋は來ぬれど、その野に風の見えぬこそうらみなれ、されど東都には萩寺の萩盛りにて、今日を色なる風情あるは、いとうれしき事なり。

今とし長月の初つかた、朝まだきより神田駿河臺の家を出でゝ、柳原河

岸をつたへ、兩國橋うち渡りて南割下水にかゝり、柳島妙見の流れの中程に、ものさびたる一ッの寺あり、龍眼寺（天台宗）といふ、これ萩寺なり、他人に問ふて尋ぬれば此處なりと、茅葺屋根の仁王門より內に入るに、萩は盛に咲出でゝ白の八重、一重、二季咲の宮城野、紅と白の絞り咲き、糸萩なんど露にしめりて、花くつきりと色美くし、本堂を右に折れて進み行くに、二ッ三ッの床几あれど、時すこし早しと見へて憩らう人影もなし、彼方には風雅なる四阿、小亭あれど澁茶ねだるべき主人も見えず、みちも せに伏せる萩は、しどろに亂れて、露に頭重げなれど、それ掻き分けながらさゝやかなる土橋渡りて、標門の邊に至るに、若き寺男の箒もて落花掃き寄せ居たるに逢ひぬ、小腰屈めて此寺に萩ある由來など問へば、いと懇ろに語りぬ。

太田南畝の一話一言に、本所押上村（今は柳島村）龍眼寺を萩寺とい

ふ、龍眼寺和尚萩を數奇て數莖をうゑ予に詠せよといふ

きゝしより見る目ぞまさる此寺の
庭におりしく萩のにしきは　高辻大納言家長

此寺に碑をたてゝ芭蕉翁の發句をかけり『ぬれてゆく人もおかしや雨の萩』近比萩寺にゆきてみしに、此碑なしとあれど、今年あれ行きて見しに、何時の頃よりか再建しけん、本堂の右手に此碑あり、傍に小さなる票札樹てゝ芭蕉翁桃青の名吟、素九書明和五年建碑園生記の文字あり、碑は苔蒸し物古りていかにも百二十餘年を經たるものやと思はる、南畝が見たるは文政一二年の頃にして、今よりは七十年も過ぎにし事なれば、其頃は如何ありしか知られねど、江戸名所圖會に萩寺の賑はふ繪あるを見れば、文化文政の頃に、この碑無しとあるはいと疑はし、されど今も此碑は萩の茂みに隱されて、心せでは見出しがたき程なれば、其頃もまた咲き揃ふ花につゝまれて、南畝の眼には觸れぬにやあらん、さなくば後に造りしものか、いづれにしても今は碑あり、されば家長公の和歌を詠まれたるは、安永年間の事にして其頃は未だ僅かに數株の萩なりしを、此頃より其名漸う世に高くなりて、雅人の杖を曳くもの多くなりけるまゝ、後には數百株を增し、港を構へて雅人清賞の坐に供し、見る人の物せる短冊の、いとも美事に彼方此方の枝にひらめきて、人足殊の外賑わしかりしが、安政二年の大地震と、翌年の海嘯に荒れ果てゝ、其根も絶えなん有樣となり、明治の初年土地開墾の事より、益々見る蔭もなくなりて、庭の隅にたゞ三四株荒れたる儘に任せ、ぬれ萩の月影にはらゝと溢るゝを誰見る人も無かりしが、明治十五年の秋の頃とか、西四辻公かたじけなくも皇后宮の御内命をうけて、此處に杖を曳きたまひ、荒れにし園を御覽じ、い

たく惜まれて、「花にきゝしむかしの跡のそれとのみ、匂ひ殘れる秋萩の花」と詠じつゝ、いと物足らぬ心地して歸りたまひける、當時の住職神田順達ぬし素より風雅の心がけ淺からねば、何とかして復び元の姿に回さんものと、いろ〳〵に心を用ひ力を盡し、萩數多植ゑ足し、新川なる廣岡無經ぬし達と計り、寺内の摸樣を繕ひなどしてければ、十九年の秋の頃より漸うに盛り行きて、今は二百株餘の多きに達し、古根も蔓り寺内明地なき迄に茂れる萩の色美くしければ、見る人も花の咲き代はるごとく、いと賑はひけるとなん。

われは寺男に禮をのべ、別れて垣根にそひ進み行くに、觀萩亭の扁額かけたる草屋あり、いと風雅に見えて床しく、後ふりかへりつゝ右に折れて、只ある蓮池のほとりに出ける、土橋の兩側に萩數多植えて、渡る人は花の雫、葉末の露を分け行くやうに見えておかし、古池の水はゆたかならぬに、昨日迄は佛相をそなへしとて、蓮臺近く召されし蓮も、大方は下葉枯れて風にも堪へぬ風情はいたまし、露に裾の重うなるも知らで、進み行き、本堂のかたに出づれば、木魚の音高く響き、和尚が看經の聲物淋びしげにて、秋の景色を補ひ顏なり、それより向島に出でゝ、三圍の社牛の御前の境内をそゞろ歩き、百花園の七草に厭くまで秋の色を貪り、歸りは虫賣の後を追ひて竹屋の渡場より淺草觀音の境内に晝を過し、さて家に歸りしが、今日の遊びの樂しさ忘れがたく此事かいつけて後の思出となしぬ。

花屋敷と道灌山

秋も未だ末ならず、萩の下葉も色つかぬ頃、日ごろは忙はしき身に

も、少しの暇ありければ、いでや今日一ト日、近き田舎の野歩きして、葉末に宿る露を轉がし、夜は茅の榻端に落ちかゝる月を眺め、亂れ鳴きの虫の音聽きて、風騷ぐ旅枕の哀れを掬まんものと、朝まだきより神田猿樂町の寓を出づるに、此處には親御が國許より仕送る汙に衣食して、世の哀れはあまり得知らぬ書生衆の、眠り足らぬ廓の遊びの朝歸りに、相乘の腕車の中に居眠りながら、夢を載せて鴻雁の北里より來たる人と行違ひに、萬代橋より兩國橋のたもとに至れば淺草行の川蒸汽一聲の笛の音に、今もや漕ぎ出んばかりなれば、急ぎて船に打乘るや、直に波を蹴立てゝ走るにか過ぎて吾妻橋の根にぞ着く、枕橋を渡り向島の堤に出れば、川霧のうちに淺草寺の塔見えて、待乳山の森塒を離るゝ鳥の聲に靄は晴れたり、竹屋の渡し舟は花賣豆腐賣などを載せて、刻限の早きを知らせ

顏なれば、秋の印は葉櫻の散るに知られて、何となう物淋しく、三圍、牛御前を過ぎ白髭の社近くより右に折れ、花やしきに入る、花頭陀菊鳩が編みし墨水遊覽誌に、この花屋敷を梅の隱居又新梅やしきと云ひ、百姓平兵衞持とあり、その梅の事を記せる中に、唐は西湖日本は墨水寺島與孤山林和靖に倣て、梅樹三百六十株移植、其實をひさいで以て十餘人の口を糊すと云々、園中山野自然をうつし、春夏秋冬の花卉花木、一日に一花ひらかざるはなし、其外詩經萬葉の草木色香を競ひ馥郁たり、秋野七草園中第一の景物なり、と書きて加藤千蔭村田春海など當時の名家の和歌を載せぬ。さ月中三日花やしきを尋て『みな咲ん春をぞ契る五月雨の雨の名におふ花の下陰』はるみきさらき十かは花のさかりなり、『やさか摘む越路の雪の薫りなば斯社あらめ梅の花園』千かけ。今その園に至り見るに、入口に芭蕉が春もやゝの石

碑あり、茅葺の家二棟三棟、床儿を其處此處に置き並べて、客待顔の若き女子の紅白粉を粧はぬもうれし、秋草は殊にその名も高きたけ、種類いと多くして、筑波那須二荒なんどの女郎花より、宮城野の萩をさへ植つけあり、花は時を得顔に咲き揃ふて、露に頭の重げなるもあれば、路もせに溢るゝ白萩の、花を踏まんも了得に心無氣なれば、足つま立てゝ歩むに、箒とる庭男、花の蔭より出でゝそれ掃きましよとは、さても風流氣無き男やと、奥手に進むに土橋架りて小なる古池あり、形は茂る秋草に裏まれ見えねど、枯れ蘆の哀げなるも見ゆ、園内廣ふして路縦横に別れ、歩めば秋野を行くが如し、歸路は引船の通に出で、柳島に廻りて裏手の方の路あるを、的も無くそゞろ歩くに、さる方の別荘なんど幾所もありて、門や垣根に數寄をつくし、庭園なども已が好める儘に築き、斯く靜けき土地に悠々と世を經る人は、

總じて事足り物裕かにして、苦勞心配も少なかるべしと思ひ、如何なる者の假り住居か、心憎きかざりなりと、破れ垣の隙より中さし覗けば、齢未だ五十路に足らぬ尼法師の、色飽くまで白きが、萩草茂る庭前の床几に腰かけ、庭造りの男呼び出して、花の培養を指圖するありさま、見るから床かしく優しげなり、浮世の垢には染まぬ姿あれど、打扮は白衣に鼠紹の被布を纏ひて、庭下駄の輕げなるにも、この尼君とても一度は花の美事に咲きし身の、翠帳紅閨の枕を俱にせる主樣の、早く世を逝りたまひしに、義理人情に迫られてか、たゞしは鴛鴦の契り短き世を敢果なみて、六塵五慾の巷を遁れ、花にも鳥にも涙を灑ぐ、富貴の家の世を忍ぶ尼なるべし、さればこそ召仕ふ女中の服裝も、何となく氣高くして、文金の高髷に御殿化粧せるはいとも優しき心地ぞせらる、頓て正午にもなりければ、近所の料理屋にて腹をこ

しらへ、車をはせて上野に出で、汽車をかりて王子に至る、瀧野川は未だに紅葉色つかず、飛鳥山は春の偉をも止めずして、木の葉早くも散りかゝるに興薄ければと、急ぎ道灌山へと入りぬ、時まだ早ければ葭簀張の茶屋に憩ひ、澁茶啜り、田の面亘る涼風納れて、肱枕に夢を結ぶ、夕陽木蔭に落ちて、麓の村の鎭守の森漸うに黑み初むる頃、兎角して明月出でぬ、虫の聲々四方に起りて、夜はハヤ更けぬ、月中天に昇るにしたがひ、虫の音一入高うなりて、森々たる夜の景色、野中に立つわが身の周圍にあつまりぬ、見る間に青草の葉末に露光り出して、石上に座するわが身は、松の雫かしづく、白露にか、衣いたく濡れぬ、なほ飽き足らぬ虫の音、月の光を荷ひて、日暮里に歸れば、後の山崩れかゝるやうの音して、汽車は早くも上野へと過ぎ行きぬ、谷中に着く頃には虫の音漸う遠くなりて、月にも風情は無くなりぬ、不忍池に映る月の垢ぬけしたるを横に見やり、廣小路へ出でし頃には、夜風に戰ぐ柳蔭に瓦斯燈の光り青白く、街頭を照して、遠吠えの犬に更いたく闢け、上下見れど人影なければ、八百八町我物のやうなる心地せられて、我が家の門に着く時、彼方より縁日戻りの虫賣、秋を擔ふて山の手の方へと急ぎ行きぬ。

夢香洲

花見は酒より始むべし。酔眼朦朧墨堤を遙逍すれば雲の上を踏む如くなれども、糟も嘗めず一滴も味はず、眞面目切つて、上下流の花見すれば、萬丈の紅塵肝癪に障り、この夕暮の風に、花の輕く散るも、埃の重量手傳して、むざと餘香地に薫らすかと思へば、さては浮世の怨

めし、今年櫻に何んの罪障ありて、日毎の風雨に付け覗はるゝ事や、偶かに晴れし今日一日、しかも大祭日の午後とて、人出は恐ろしき程なり、我れ風片子と共に其日の二時頃編輯所を出でとぼ〳〵と、永代橋を渡り、川蒸汽に乘り込めば、乘客はみ出す程塞がりて、靴れも向島に行く人のみなり、中に六ツ七歳ばかりの小兒ありて、馴々しく微笑むに、可愛さ耐へられず、何處に行くと問へばお花見と云ふて、莞爾と笑ふ、新調の衣裳珍らしさうに眺めて、此方に見せて誇顏する樣子、その罪の無さ加減、まこと小兒は人間の春なり、何となく陽氣に見えて、くよ〳〵思ふ母御も、これにはぞつこん嬉しかるべし。二人はその小兒を愛して居る間に、何時しか母とも親しくなり一ツ二ツの噂話する間に、船はハヤ大橋に着きぬ、此處よりも亦乘る人ありて、船中立錐の餘地なく、兩國に着ける比には、その小兒我に馴れて、膝

にうち臥るなど、年を問へば指屈りて答ふ、後邊振り向きて母に、伯母さんの家は未だかと云ふに、未だ〳〵と云はれて、舟厭きしか欠伸ながくして、つひに何時しか寢入りて正躰なし。廐橋の下に來れば、腕車の響いかめしく、年頃の娘美くしく着飾りて、乳母らしき女に手を引かれ、向ふの河岸端を歩くもあり、船東橋の岸に着けば、橋上には緋毛布着たる、田舍の人々、珍らしげに此方を眺め居るに可笑しく、風片子笑つて云ふ。田舍人の花見に毛布着るは深き譯あり、汝それを知らず、徒らに冷笑するは悪ろし。抑も毛布の効能は、宿屋に在りては布團の上敷となりて、先夜泊りし旅人の置土産なる、蚤虱の進撃を防ぎ、道中には辛らき雨風を凌ぎて、花の座に莚となり、鄙の酒引ッくり顚されて、正宗劒菱に腸をえぐらる、悲きは毛布の身にして、便利重寶なるも毛布なり。汝も故郷を出る時は、緋毛布にくるま

りて、白河那須野の秋風、肌にヒヤとも覺えざりしは、これ何の庇蔭と思ふぞ、はや今の身分になりて、昔時の辛らさを忘れたるこそ面憎くけれ、吾も北海の鯊毛に、鶴擊を着て徘徊せし痩我慢、今更思へば是も彼れも、毛布の情けなりし。お氣の毒なは函館新聞の御方々寒風樽に音信れて、吹雪パッと窓に散るを、都の胡蝶、落花に狂ふと夢見給ひて、此方の空眺めらるゝかと思へば、斯くぶらつくも恐れ多き位なりと、無中に饒舌りて四邊を見るに、さて最前の兒は居ず、如何にしけんとうち見やれば、竹屋の方に行くは、確かにそれなり、漸やく追ひ着きて、後ろより母の肩に倚れる、小兒を愛すれば、相變らず愛嬌溢すに、譬へば香に迷ふ蝶の如く、花の巢は彼方の岸に棄てゝ、竹屋の渡に出たり。小兒を抱きし婦人は、角の何屋と云ふ宅に入りて、掌中の珠むざ〳〵と失せぬ。それよりは花俄かに恐しくなりて、一散

に舟に乘り込めば、船頭さも氣長さうに棹繰るに二人はいよ〳〵自烈躰く、清き波を碎きて舟端に寄る都鳥を捕へんとて乘合に叱られ、落花水に紋を畫くに見惚れ、舟を出るのを忘たるなど、近來の失策なり。

堤に出づれば、雜沓混雜云はん方なく、大聲あげて此方に來る泥醉あれば、目かづらに顏を隱して、跳りまはる生醉あり、お嬢樣は路傍に避けて、軍人を通せば、高帽の官員樣人を分けて通らるゝ威嚴しさ、我等如き酒呑まぬ、嬶鳳御人物には、その權幕に怖れて、遁げて三圍に入り、牛の御前に出で、長命寺の古碑を探りて、さて寺內に在る芭蕉の木像を拜するに、堂は二間四面もある、萱葺の屋根古びて、煤に黑芭蕉堂の扁額かけあり、中には蕉門十哲の額二面飾り置きて、檜みたる樣風雅なり、裏門よりこと〳〵、問圖子の前に出で、堤上を行くに、

今日某校の競漕あるとて、植櫻の碑畔は人山の如し、それより進めば、兩側の櫻花枝を交へて、天も見えず、ちら——ちらと飛んで襟元に入る落花、香薫ばしく、彼方より爪彈の音聞えて、振り向けば藁屋根の藝者屋あり。楹に御神燈吊して、格子戸何となく床し。何時しか白鬚の社も過ぐれば、人家遠くなりて、處々の鼓簀張の掛茶屋には、蜜柑うで玉子鰯など賣りて、田舍娘の澁茶煎るも可笑し。小松島園より奥は、花見る人も少なくして、田面に案山子騒ぐもあり。水神の森彼方に黒く、晩鴉空に叫びて、淺草寺の鐘陰に水に落つ、梅若塚に至りし頃には、明月昇りて萬波金を熔すかと怪まれ、畫の繁華に引き比べ、夜は一層に寂寥して、地上白く落花雪と騒ぐも、馬蹄香ばしからず、祠前に額づきて拜し奉れば、古鈴幽に響きて物淋しく、松風萱の楹を過ぐれども、颯々の聲なし。木母寺の念佛、頓に歇みて、綾瀬川の水

音咽ぶかと思はる。此處を出て歸路につけば、月光きら〳〵と花を照らして、龍の鱗を晒すか、雲の虹を包むか、兎も角も我は羽化の神仙なるべし。風片思ひ切つて云ふ、我等神にあらず仙にあらず、たゞ煙草に酔ひしも同じと、何故なりと問へば、月がよいとて夜をふかす故なりと、早々歸るべしと手を握つて聞入れず、我もまた引かるゝ儘に、間も無く大倉別莊の邊に來りぬ。一軒の料理屋ありて門口に漂旗樹てゝ、業平蜆に小町豆腐の文字あり、我等酒には兜を脱ぐ連中なれど、此の一對の意氣な料理に、俄かに空腹を覺えて、足一歩も進まず、其處の厄介になりて、先づ腹を塞ぎしが、此處に來て飯とは粋無き方々と、下女臺所にて笑ひぬ。家より出て車にうち乘り、枕橋何時しか過ぎ、河岸端にかゝりて、首尾の松駒形堂、其處彼處と指さして、今夜の景色我物のやうなる顔し、さて月に送られて築地に着きしが、一

日のぶらつきにいたく草臥れて今宵はこゝに泊すべしと、羽織脱ぎすて、つひとろ〳〵と机に、臂もたせての居睡り、蝶が枕元に來たと夢見て、俄に目覺し、見れば一片の花、本の中に散り殘りて、餘香妙に匂ふに、弗とまた今日の遊び事思ひ出して、衣うち振るにひらりと二三輪、袖の間より落つるに嬉しく、それ集めて押し戴き、硯箱の水入に載せて、薫を筆に包め、唧か花の紀念として、斯くは物しぬ、看る人、酒飲まぬ酔人の涎と見て可也。

行春の王子と日暮里

風片子の役柄から云へば、のぞき通信の博覧會なれば、覗きしばかりにて事は足るべし。今日の通信は主人お助太刀仕つるべければ、いざいざ、飛鳥山にお供致さむと、無理鎗煽動こみて、水産館を飛び出し、噴水器の邊に至れば、何處からか舞ひ込みしか落花二三輪、波に揉まれて、ひら——ひらと、魚ならば緋鯉の鱗らしく見ゆるので、あれ御覽ぜよ風片先生、花の命は長くても十日か二十日、三日の後には雨も降らん、風もざわ〳〵吹き申さん、限あるしろ物を見捨、去かも四ケ月百二十日の春、悠々と見物せらるゝこと、ちと方向が違ひ居るなり。ソモのぞき通信といふ題名はまことに氣樂に聞ゆるなり。鼓の管から天上を覗くといふ意味にて、大を小に縮めて見るなれば、左程心配もあるまいけれど、何しろ十八萬餘の品數、北海道ばかりの出品にても、五千と三千は請合なり、のぞき通信大業の事お察し申す。御心勞御保養召され御前と、煽ぎ立つれば、風片子今は華族がりて、隨行の瑞雨子に中等切符買さうとするを、主人忙てゝ呼び止め、否々奢る平

家後生恐ろし、のぞき通信の材料、結句下等の乘客にあり、扨て〳〵と、向ふの志を曲げてやり、さて上野下りの汽車に飛び込み、下等室の片隅に縮み居れば、來たは〳〵田舍出の紳士令孃、中にも年嵩何兵衞の子息殿、丈の短かい羽織に、風羅紗の高帽子だけは江戸ッ子向ど、其口で惚氣聞かれたものでなし。淺黃木綿の脚袢かけし婆樣連、汽車が出ると急かれても、一向沈着たるものなり。乘つてからも叮嚀に一禮し、彼方に腰かけしが、鐵漿の脫げかゝりし齒をむき出して、げら〳〵と笑ひ、談話すれば、聲鼻に貫けて可笑しく、唾を四邊に飛ばさるゝに弱り、漸やうにして王子に着きぬ。三人は脫兎の勢ひにて、飛鳥山に這ひ登るに、さて殘念やな、今一日早かりせば、斯くやみ〳〵と落さぬものをと、親の仇でも遁がしたやうに殘念がり、葉櫻の蔭に休めば、茶を汲んで出すは四十ばかりの婆にて、この花に一對の

遲れものなり。されど建て並べたる葭簀張の茶屋、未だ取り拂はず、中には花見らしき人も見えて、チヽちん——ちん爪彈の音床かし、彼方には小學校の運動會ありて、旗奪ひする生徒あれば、紫めりんすの袴ひらつかせて、樹の間の落花波と騷がすもあり。あらヽ面白しと見てやれば、驚くまいことか、傍の床几に腰かけ居たる十七八の美形、主人が委好きに見惚れしと、當てもなき惚氣聞かして、性惡るの風片子に蜜柑買はされたり。まことその美人の風姿、高髷に黑縮緬の羽織、瀧縞お召の上着もよく。お化粧少し妙なれど、何にいたせ美人なり。その者しげ〳〵秋波を送るに、今はその聲聞きたくなり、耳欹つれば驚くまいことか、存外の田舍者、巧みに化の皮被りしなり。まこと今年の博覽會は田舍物持の孃樣、續々と出來給ひ、女髮結に生來の癖嬙められて、文金の高髷江戸風になり、柳原立身の羽織に、姿はそつく

り田舍摸樣は脫けたれども、言語は故鄕の手形、饒舌られてはたまつたものにあらずと、足早に山を下れば、瑞雨子燒筆と出來上らぬ寫生板兩手に提げて、乙羽には困ると溢しながら麓に下りぬ、

製紙場の煙も見えず、遊人の騷々しきも無く、麥靑く菜の花黃む田甫に出て、日暮里に至るに、稻荷樣の祭禮でもあるのやら、飴賣の喇叭勇ましく、腕白小僧の鬼事別して妙なり。さて其處も無難にて通りぬけ、養福寺といふに至るに、門に『梅翁花樽碑』の目票あり、山門には彫の巧みなる仁王尊ありて、其裏手には二天王の木像あり、何れも漆丸げて古雅。堂の右に一抱へ、の枝垂櫻ありて、其の下に宗因の碑あり、碑の正面には

於我何有哉
江戶をもつて鑑とするや花に樽

碑の右側には

我戀の松島もさぞ初霞
とてもなら松の命を山さくら
ありくと夜の紅葉や鹿の聲

また碑の左側には

時雨そめ黑きになるは何々ぞ
明月や何處その隅にほとゝきす
獨居に馴てかしましかんことり

碑の裏には

天和二年壬戌三月廿一日
元祿六年癸酉八月十日

俳談林初祖梅翁　西山宗因

二祖　松壽軒西鶴
四祖　曲庵玄哲
六祖　五千堂蒼狐

三祖　狂六堂才麿
五祖　活井舊室
曲庵門　古道左儺

初祖
二祖

元文二年丁巳正月二日
延享四年丁卯五月廿七日
明和元年甲申十一月廿八日
明和三年丙戌十一月六日
安永八年己亥十一月廿三日

三祖
四祖
五祖
六祖
古道

花樽碑の向ふ側には談林數祖の略傳碑あり、其の隣に浪華の葛質が撰ぶ詩人柏山人の碑あり、苔青く風雅なり。折から暮鐘響きて念佛の聲いと哀れに聞え、夕風に騒ぐ落花白く、無下に下駄の齒にかくるも不愍なれば、飛石傳ひに表に出で、天王寺の五重塔の下に來りし頃は、角の花屋は戸を閉ぢて線香の匂ひも無く、墓一ッづゝ黒み亘るに、何となく物淋しく谷中護國院の森、一刷毛さッと墨を抹して、鴉啼けども形見えず、三人ぶる〳〵ものにて、さて漸やう池の端に出たり。此に於て風片子主人に無極庵の蕎麥を振舞ふ、故無くしてこの奢り方、後日恐るべしと思ひしに、果せる哉、今日の行遊をのぞき通信の餘興にせよ、文は汝の拙いも構はぬ、書け〳〵とのッぴきさせぬ手詰の催促、弱り切ッたる其上に、腹存分に膨せしかば、返辭するのも厭、た〻頭を垂るゝを、彼方は承知と心得しか、別れて二三日過ぎての夜、瑞雨の繪出來たるが、紀行は未だかとせがまれ、扨大膽にも王子日暮里の記を書きぬ。

盆ある記

魚河岸の囉聲に驚かされて、考へ凝らせる文章の腹稿散々に破はされてより、日本橋の住居嫌になり、本所三つ目に明家一棟を我物。

にして、釣堋の一釣竿に呂公を氣取れど、これと思ふ名作の獲物も無、ければ、病氣全快を名として、又候或編輯所へ出仕怠りなく、朝は隅田川の細長き手水盥に嗽き赤馬車の鈴を夢覺にする洒落たるやうな墓なきやうな身上なり。

七月十五日は水天宮の緣日なれど、それを無情横に睨んで、兩國の橋のたもとに涼風たッぷりと土産にして、借宅なれど戀しき我家に立歸れば、留守居の婆々夕暮の蚊遣燻して椽側にちひさくなるに、今歸りましたと口を開けば、煙に鳴咽て堪え難きに「こりやたまらぬ」と、汗に染みたる單物を蚊飛白の浴衣に着代て、表に飛び出れば、晩鴉林に騒いで蛙の聲溝池に鳴く、世の中はこれでも足ると溢團扇に風を呼びて、三之橋に立てば向ふより口笛吹きて、北二葉借紅園一隅に住む風片子來りぬ、用事はと問へば散歩なりと云ふに、左らばと連れ立ちて

菊河橋に至るに、日落ちて茜色の雲西の空に殘り、塒急ぐ小鳥二三羽材木屋の品物を出でゝ水に影を黒むれば、舟の蓬窓に炊ぐ煙立昇りて、酒買ひの小僧深川の方より戻る、角の交番右に折れて龜戸村を離れ松倉町に出づれば荒びながらも町並揃ひ物賣らぬ家の檜に、涼み提灯山水の摸樣青く、鼓籠に風の見ゆるなんど、盂蘭盆の景色嬉しく、節季節物の古風存るは片田舍にありとて、其處の法音寺に墓參の摸樣見んと間近く進めば、門鎖して人を入れしめず、しまつたりと洒落にもつかず、地口にもつかぬ愚痴溢しながらも、其裏手の禪寺に至るに、此處には、門も無ければ人氣も無く、入口に一株の古松ありて、根方に葦簀洒山門の制石あり、苔蒼みたる石塔二ッ三ッと算へながら奥の方に至れば、木葉隱れに白張の提灯一ッ、それッ！飯島お露さまがと恐嚇や、風片子年にも似合はぬ臆病者、やッと一聲我が肩に倚るに、

どッと笑ッて其前に至れば、線香の煙立昇りては宙宇に消え、燈油竭きて影小暗くなるに、未だ生々しき土饅頭なり、樒の花筒風に脆くも倒れわれど、此處の番僧それ直さぬと見れば、心無く手向る香花、何んの後生の爲めにもと、坐に浮世を果敢なみて此主何人と雨に黒みし卒塔婆引抜き裏がへし見るに、戒名墨流れて確と見えねど、信女の二字微に讀めしも老年の上にて死したる女ならば、兎も角これが若しも月も花も廿歳前後の置土産にして、徃生たる者ならば、浮世の戀に心殘りて、昨日今日の魂祭りに迷ひ出る事必定なるべし、二人無粋にして未だ冥土に戀人無ければ、眞實の哀れ知り得ねど、一樹の蔭も他生の緣なり、一遍の回向能持せよと、我先頃淺草本願寺境内にて、買ひたる念珠繩の財布より取出し、爪繰て南無阿彌陀佛。

花屋を右に田圃に出づれば、螢二ッ三ッ空に飛ぶに澁團扇にそれ落さ

んとすれど、ひらり〳〵と手にはかゝらず、道無き道に踏み迷ひて、深草に裙を濡らせども、面白さに足を進めて、横川河岸に出るに、向岸は瓦燒く枯松葉山に積んで、影眞黒なれど螢火微に水を照すに見れば闇に船漕ぐ者あり、船頭に此處何地と問ふに、中之鄕村なりと云ふ、川に沿て上る四五町、華族樣のお屋敷らしき大きな構への前に來れば、七八歳ばかりの坊樣白地大摸樣の浴衣に、紫めりんすの兵子帶、なか〳〵に可愛見なり、我螢四五疋持てるを見て失神と眺めらるゝは、これ欲しがり給ふことゝ、白兵子帶の端切に包みたるむさきものなれど、進上すれば嬉しさうに彼方に走せて、門口の床几に腰うちかけお在する姉君に見せ給へば、何人にお頂きと優しきお聲、禮云はれなれば勿躰無しと足早に通れば、後邊に坊樣の聲聞えて、あの叔父樣にと云はれき、業平橋といふ意氣な名の橋うち渡りて、氷屋に憩ひ、

業平様の御社あるかと問へば、知りませぬと云ふに、又二三町行きて塘煎餅一袋に此事を聞けば、其處の婆々叮嚀に由來を語る、お社は無けれど、業平は色男の業平でなく業平といふ角力取が此町より、むかし昔時出ましたさうで、あア左様かと云へば、江戸砂子に見えましたと古書を調べての返答に驚き、店の看板見れば本字で業平煎餅と書きつけあるに判たり、此處の悴定めて敎師でもする事なるべし、其の町を四五町行くに、三ツ目の通に出でたるが、圍扇遣ひながら大道講釋に聞惚ろ〳〵職人躰の男は、今日地獄の釜の蓋明けと共に久々にて耳の蓋明けすると覺えぬ、尾州侯の屋敷跡貧民院を左に折れて、其處此處と駈け巡り、津輕ッ原といふに至りて、氷屋に氷品切れになり、緋毛布の床几に白粉つけし十八九の新造並び居て、それで客を呼ぶは不思議なる商賣なり、北割下水に五百羅漢寺ありて、門外の柳闇に葉を交

叉きて物凄く、本堂入口の楹に朽ちかゝりたる魚板釣しあるが物古びて、なか〳〵風雅なれば、これ眉山先醒に御覽に入れたし、風片子の宅漸う近くなり、我家漸う遠くなれば、左らばと、此處に袂を分ちて、我は獨り二ッ目に出たるが、此處なか〳〵に賑ひて、兩側の露店はや無しの手洋燈の門火燒くかと思はれて面白し、お店者の宿下、職人の物日、娘子供の遊び日、むら〳〵と往來繁くして、二之橋の際に巡査立たれて人群を制されたり、見れば我眼前に十七八の束髪の孃樣鈴虫籠下げて、乳母らしき年增に手を取られながら、黒塗の東下駄輕くからんころんと歩かるゝ樣、此世にあらうとも思はれぬ程の美人なり、此夜我散歩しながら束髪の娘幾人と算へしに、如何に塲末なればとて此孃樣が束髪の一人目なり、束髪は山の手のお孃樣ばかりに限らぬものを、此人ばかり本所の流に染まず、蓮花の水を出でられしは如

何なる高家のお姫樣なるかと、其人の後に跟いて四五町も夢中で歩くに、鈴虫時々音色を出して、涼風嬢樣の袖騒すに、得ならぬ薫芬と匂ひて、鳩居堂近處にあるかと振り向けば、未まッたり、區は深川に入りて覺え無き町内なるに、氣がつけば牡丹燈の昔時、今に戰ッとして怖氣立つに、それよそれ〳〵禪寺にて、風片子恐嚇やりたるお露がこと今の我身に酬ひ來りぬと身震ひして引き返したるが因果應報に胸を撲たれて、後の祟り恐ろしく、懺悔文一篇で浮かんで下され、お露どの。

江の島入洞記

横濱はもと狐啼く草深き小村なりしが、太平洋より眞額に吹きつくる

波の福を荒磯に引き止めしより、今は内外汽船の喰ひ詰め處となりて、全國の富は此の港より分配せらるゝやうになりたり、昔時は百萬の兵を喰ひ止めし關東の要石なる箱根八里の山路も、鐵道の便利によりて夢の間に、富士の麓へも行かるゝなり。さても〳〵變る世の中なる哉。油斷して恍然して居らば、別莊の桑田は海と變ずるやも知れず、今のうち名所舊跡を觀置かずば、後に頭を掉りても考へ出せぬ樣になるは必定なりと、妙な事に肩を持たせて江の島の名所を尋ぬるも、また地理學問の一つなめりとて、去來子と云ふ洒落者と共に、新橋より東海道行の滊車に乘り込み、さてこそ其處へと進發せり。これが別れの杯かとも云ふ姫御前無ければ、山を抜く力も折れず威風凛々く、平日より元氣好き顔色なり。高輪に來て忘れたる事も無く、泉岳寺いろはに墓の古事を思ひ出しては、机文庫の寺小屋にて學問せし幼なき頃

が戀しくなり、品川の臺場を見ては、幕府の方々の臆病を笑ひ、傍に洋書を讀んで居る日本人への手前も悪るく、笑ッたり悲んだり、轉輾反側と云ふ有樣にて横濱に着き、神奈川を過ぐれば海遠く山近くなりぬ。是よりは見處なりと目を注ぎて、變ッたなナと云へば去來子は早呑込みに、また詰らん感慨をと云はんとするを。イヤこの景色で目先の變ッたことゝ旨く通道を求めしが、さて東海道の舊道はと問へば、ソレノ細い一間程の道なりと答ふ。この細い道、これで五十三次の價値も思ひやらるゝ。されど東海道宿々の飯盛は今も客を戸塚まへるも、汽車に乘りては憚りの外は下るを思はず、ツンと横を向ひて通られては、益々疲弊に程が谷も過ぎて、次の宿場も停車場近傍を除きては、轍に息つく大ぶなに暑きけり、今宵の月を的にして江の島泊りと定めたれば、藤澤より汽車を下て腕車を雇ひ遊行寺に至る。寺は先年

回祿の災に罹りて、未だ假普請中なれば、あて込みし程の見處も無く、只小栗判官照手姫の古跡を訪ふては、語らぬ惚氣を聞く如く、我等獨身者には妙に思はれて、さう〳〵にして寺を出づ、生憎二人の乘りたる腕車は、一人乘なれば變な話しも出來ず。車を隔てゝ痒きを掻くが如き心地し、得意の洒落も出ず。江の島にて遊ぶ新趣向の内談も虚空となり、こんな事なら汽車の中にて熟議して來るのにと悔ひても後の祭り。祭りと云へばアノ向ふの正一位の旗は稻荷の祭りか。と問ふても去來子は居眠りして馬に錢、錢を增さずば急がぬと思ひし故、酒代を遣ると云へば。ありがたう旦那お宿は。と問はれても知る氣遣は無し、我はポッと出の地方者、されど負け嫌ひの氣性なれば。さうだ去年只今では何處が宜い。と尋ぬれば夷屋なりと答ふ。アゝさうも、と云ッてこれにて只今ではと云ひし言葉に照應させ、間抜けぬ積

りなれど、車夫は合點せしにや底までは知らず。（一旦那參りました。ナニ此處か。こんな近い處ならば酒代はと口までは出しものゝ、江戸ッ子氣性見せる積りなれば、云ひたきを云はれぬ胸の苦しさ負惜みとは思へども。これでも一里半か今の道は。と聞返せば車夫は眞面目になりて、途中の景色の好いので、初めての御人には近く見えるといふを聞いても何う見ても我等を初めての客と見込みたり、一本擔がれたと思へば、今度は野暮を見せまいと思ひながら車を着けし茶屋を夷屋と心得、內に入らんとすれば此時已に去來子は目を醒て居ることなれば便所かと問ふ。さう。と答へて漸々に野暮を世に出ださずに濟みたり。旦那お宿までお荷物を。と車夫は先にたちて溶ろけたる壯丹餅を踏む如き砂地を歩して行くことなれば、我は新手の失策を恐れて、これでは景色も滅多には賞められぬ、いつ宿に着いた上ならば恥にもならず、野暮云ふても聽く者は去來のみなりと、藥て難き景色へのお世辭をも、宿に着くまで、持腐れの賓とするは、さても口惜かりし事になんありける。

江の島に着き、一の華表をくゞり右側の三軒目の宿屋の前に至りて、二人の車夫は天窓を下ぐれば、內では素的の別嬪が、お疲れさま、お早う御座いますと云ふゆゑ、我は氣を利かして眞先に此家に入り、別嬪に導びかれて二階座敷に通れり。見渡す景色の美しきこと此處へ來てこれを賞むるは野暮の至り、間も無く茶菓も出、宿の浴衣と着換へて海水湯に浴すれば、光明皇后の侍女でもありさうなる女中が垢を流して呉れる氣の毒さ。されども去來子は興醒め顏して湯より上がると、女中も手持無沙汰の風情にて吾が背中を流して呉れるゆゑ、肌の色は兎も角も、去來子と我の氣性とは、まるで雪と炭程違ふことをなれ

ば、跡に殘りて他人の言譯までも云ふ心惡るサ、されど餘り長湯は御家の法度でもあるまいかと、佛性だけに氣兼して上る、二人は一ツ二ッ洒落て居る間もなく、料理の杯盤を運び來れり、呑んでの上の巫山戯として、去來は杯を手には把りしものゝ、二人ながら至ッて下戸なり、肴はと云へば鯛のてり燒、鮑の淡搪、蝦鱸何やら彼やら、見たばかりにて食はぬ物まで諄々しく云ふだけ野暮の至り、去來子は夢中になりて女中にからかふのを見ては、我も臥龍先生を氣取られもせず、口を出しては見たものゝ三顧の優待も無く、的も無く兩虎猪口を爭ふ時は、一虎斃れて折角の月夜を空に明すも如何と思ひ酒を止め飯も濟して、二人中好く月眺めんとて、端近く椽端に出でけり。

眺むれば青海原に風見えて、打寄する波、碎くる月影、千波万波は碎け散る金の光を掠めては、遙かに空に奔るかと、見ゆる間も無く滔々

とまた音させて、荒磯に寄する波間を潛りては、忽ち遠くキラ〳〵と閃めくものは金蛇なり、只見れば風に鱗は剝がれ、一片ヒラと散り渡る月の光を凌ぎては、またしも躍りて龍となり、龍また珠を失ひては、岸に碎くる波の雪、白く冴えつ、砂路には漁る小舟を繫ぎ留たり。煙は四方に立籠むれど、天高くして秋に似たり、見渡す限り耳に觸れ、眼に觸るゝものは波なり、響なり、其景色何に譬へんやうもなし。我れ去年の秋迄は、陸奥の山家にありて、萬山重疊の中に紅葉の錦、鳥の音をのみ聞き、燒野の蕨、小澤の簟、月も山、雪も山、花も山路にのみ見し眼には、この漫々たる海原を眺めて、愉快なること云はんかたなく、海士がすさびにや吹き鳴らす笛の音高く聞こゆれば、それに應じて此方にもまた吹きすさむ人ありて、送る響と打ち返す、音も澄み渡りて聞こえけり、夜もハヤいたく更けしと覺えて、暫時にして笛の音

も絶えたり、されど二人は景を眺めて一句も無く、漸々にして宿の女中に促がされて、臥房には入りしものゝ、眼を開けば窓に映つる月の影、眼を閉づれば耳にちらつく波の響きの振り棄て難く、偖睡らんとせしが眼はあはず。

海士が船出に唄ふ歌に驚かされて目を覺せば、またしても聞ゆるは波の音なり、今朝は早く起き出て、日の出の景色を見んものと、その下心にて眠れるなりしが、臥房を出て空うち眺むれば、日はハヤ三竿の上に昇れり、三貫文とは高い朝寐をしてけりと後悔すれば、日も振袖の雲間より顔を出して、お氣の毒といふ風情なり。兎角する間に朝餉も濟まし、頼み置ける車夫と打ち連れだちて門を出づれば、例の別嬪はニコ〳〵と見送りて、御機嫌克うと云ふ、この子ゆゑに泊りしかと思へば、不機嫌なる顔も見せられず、宿を出て奥山に登れり、山とは云へ島なり、窟の辨天までは十數丁ありと云へど、昨日來し藤澤よりの道中の經驗もあれば左程に驚きもせず、拜殿に額づき、寶物の來歷を聞きて有難がり行くことなれば、道草に氣を奪ばはれて遠きを思はず、名産の貝細工を商ふ鼓賓張の小屋三四軒ありて、若き乙女が島の名産買ふて行かんせなど呼ぶ聲いと面白く、坂を下りて窟に行くに、山に據りて二三軒の茶屋あり、望遠鏡を備へて、螺螄の壺燒など賣るなり、この茶屋には貸草履あり、窟に至るには此邊より先は巖石峨々として下駄などにては歩みがたきゆゑ、草履を穿ちて行くなり、されど我は中納言靴穿きたるをもて、その憂ひも無く行くに、怒濤は何か遺恨でもあるやうに巖角を噛みては、岩の上に貝の齒の痕を殘して、また隱れ去る、進めば小さやかなる棧橋を設けて窟に達せしむ、恐は恐はながらこれを渡り、松明を買ひ窟の中に入る、中には石像などあれ

ども、窟中闇々として、松明の火光は微かに身邊を照らすのみにて、餘り氣味宜からず、奥の院胎内くゞりに至れば、案内者はこの窟の奥の院は富士の抜穴に續くといふ。さても長き法螺を吹くもの哉と思へど、天機洩らすべからずと覺悟し、窟を出づれば、漁父漁童等群を成し、我に十錢賜はらずや、鮑取りて參らせん、我には五錢賜へかし、水中にて輕業して見せ申さんなど、附纏ふて離れず、銅貨など水中に投ずれば、其未だ水底に落ちざるに、逆巻く波を潜りて、早くも之れを拾ひ來る、その敏捷なること驚くべし、歸りは捷路より下り、再び宿に立ち寄り、茶を啜りて濱邊に來れば、昨夜汀に繋ぎ留めし舟は殘らず沖の方にて漁りするを見たり、平かなる砂の上には網を曝し、昆布を乾かし置けり、幾本ともなく立て列ねある杭の先には魚を懸けあれど、鳥はこれを啄むを思はず、岸打つ波の汀には、見も馴れぬ貝殻

を童子どもが集りて、互に挑み合ふて戯れたり、砂に顛びて腹の邊に砂の痣ある裸躰の小兒あれば、裳裾かゝげて魚捉ふる乙女もありけり。されば裸躰畫を美術の極粋と心得らるゝ人々も、此邊に來て思ひつかれけるものにや、我等如き無雅の俗物も、此景色眺めては、坐に裸蝴蝶を書きて見たき心さへ出でにけり。げにや小説家も一度は此邊の景色を見て置かざるまい。？

鴫の羽田

廣重のかいた錦繪に、羽田の雨景が、如何にも面白く出來てある、雨が斜にバラ〳〵松の梢をなぐつて、辨天の社に人の氣勢も無く、蘆の間から鴫が一羽、洲の崎の水を蹴て立つ趣など、云ふに云はれぬ妙

味がある、で、私は一度是非その實景を見たいと思つて居つた矢先、恰も好し光村清峰君の、神戸に行くを送つて、たゞ目的も無く大森の停車場で下りた、で、羽田迄は二里には近いといふ、乃ち大森の町に入れば、麥藁細工の大きな虎を、村の子供等が、小さい車につけて挽いて行く、これが市に虎といふ謎でもあるまいと往還を横に折れて、野道に出た、靄は遠くの小村を掠めて、枯木立に鳥の行きかひ、稻村の傍を小川の流る、危うげなる土橋を、百姓馬の通るなど、水繪にしたらと思ふ程、粛洒した景色に、我を忘れて失神となつたが、天氣が何うも怪しいので、また歩き出せば、片側に五六軒の家があつて、その最初のに、「太鼓師」と筆太に書いた障子が嵌めてある、ハテ妙な稼業もあるものよと、庭前に廻つて、太皷の講釋を聞いた、生皮と死皮と、鳴の善悪などを尋ね、狐忠信の演劇に、子狐が親の皮の皷の音を

聞いて、化けて出る事など、愚にもつかね詮議立をして居る中、雨がパラ〳〵と降り出した、で、急いでその家を出て、殆んど駈足といふ態をして、羽田の町を通り過ぎた、町外れに川があつて、舟で渡る、土堤へ出れば、海である、沖には颯と遠時雨がして、一つ二つの船が、鼠色の空と、薄青い水との繼目の、楔のやうにも見え、岸には廻船が、蓬をかけて、その窓から煙を靡かしてゐる、總てこの邊の垢ぬけした風景は、繪で見るよりは面白い、私は帽子つきの、外套を被つて居たから、濡れるのも構はずに立つて居ると、盤臺を舁げて來た魚屋が、川崎へでも行くのであらうか、土堤の上から、船を呼んだ、すると應といふ返事をして、船頭が水馴棹をザンブと水に落すと、鳥が一羽飛び立つた、誰やらの句に「鳴立つや船人呼べばまた一羽」とあるのは、實狀である、なほ進んで、辨財天の社に行けば、實に古い松

もある、神寂びた祠もあるが、廣重が筆程では無く、晴好雨奇の趣は無い、失望し、落膽して、穴守稻荷に行つた、赤い鳥居が、算へ切れぬまで建つてあり、茶屋も大分あつたが、厭味な家ばかりだから、素通をして、社の後邊に出た、松風と波の音とが先づ聞えて、それから枯蘆が見えて、トンと其處へ行き着けば、漫々たる海が見えた、一寸した洲鼻があつて、黄ばみかゝつた蘆が、水を隔てゝ、向ふの岸を隱して、その蔭の海を行く船の、帆ばかりが松の隙から見え、恰度水の中からでも湧いたやうな高樓もある、あれは何、と神官めいた男に問へば、温泉宿だといふ、料理も出來るかと問ひ返せば、まだ開業はせぬと答ふ、私は歸らうとして、また景色を見直す時、蘆の蔭から二人の獵師が出て來た、鳥打帽子を蒙つて居たが、想ふに鳥は打たぬらしい、獵銃を肩にして、陰晴定らぬ空合を眺めて居たが、直と立つて、

急いで茶屋に駈け込むと、殿樣お歸りと調子を合せた女がある、他の一人は三太夫でもあらうか、私はつまらぬ思ひをして、その儘大森まで歸つたが、嗚呼、殺生禁斷の塲所を、鐵砲臭いで通る男と、雨の日の寫眞師は、共に一對の間拔者である。

矢口の渡

赤髮が日本の土地へ渡つて來て、避暑といふ一つの變な風俗を移し植ゑてからは、東京の紳士夏分になると大磯鎌倉小田原などへ我も〳〵と出かけ、海に浴して日にやけ、寢轉び食ひ過ぎて胃病になり、秋風と萩の下葉に音信るゝ頃迄に、百千の黄白を拋て買ひ得たるものはこれ「母上只今歸りました」「おう歸つたかそして大磯のお土産は」「別に

土産はムいませんがこれを見て下さい」と誇顔して衣をまくり牛蒡のやうな黒い腕を出し見せれば「おやおや御酷くお色が黒くなつたぢやないか、恰度出山のお釋迦様のやうだ」「ハヽヽヽ身體から後光でも射しますか、これがそれ三週間に遣つた金の光で御座います」と、避暑に行て色の黒くならないものはまるで當世の紳士と云はれぬまでの成行相場、さる程に相州の海面には、好男美女の首が幾箇も波に浮かんで北條沒落の有様を現はし、汀の岩上に龜が甲を乾すでなくて、大森細工の膃肭臍が轉がつて居るやうな、洋服打扮の貴婦人居ませり、炎天に背を曝してそれで避暑になる事なら魯西亞の人が濠洲へでも避暑に行きさうなものなれど、左右した沙汰も聞かざるは彼國我の愚に及ばぬものと見える、不平序に云つて置んに、別莊の濫用は拙者甚だ喜ばぬ所だ、近頃の新聞を御覽なすつても判るであらう、何々伯だの某

々侯などゝ云はるゝ大政事家が、一朝國事に小六ケ敷ことがあれば、云ひ譯に一寸口を出し、その意見が旨く行かぬ時二言目には別莊行き、我不關焉と澄し込んで松青く水白きの邊、愛妾携帶の屈原を氣取り、別莊の門前に虛病の申譯仍如件との張出し手におへぬものなり、それのみならず御召があつても仙人磯上に釣して評議の間に合はず、何日も遲かつた由良之助を極めるはその罪何にかある、何でもない別莊の科なり、底で拙者は別莊引ッたくり法案なる者を次の議會に提出せんと思ふ、閑話休題茲に銀座の眞ッ只中に太郎坊に桃堂といふ二偏人あり、毎日某社の編輯局に筆を舐つて、午後三時頃になれば文字を考へる振して内證で居眠りもしかね間敷き呑ン氣な人物、何事によらず他人の眞似をする事を嫌ひて矢敗をとること多々、何か今度も他人のせぬ遊びして半日を送らんものと、一切萬端紳士風は鵜の毛程も吹

かせず、昨日の朝未だ夜の明けぬを幸ひ、二人名を駈落にかり桃堂は洋服に山高、太郎坊は紺飛白に藍棒の古袴へ草鞋を着け、新橋より車を飛ばし品川の入口にて下り、徒歩して鮫洲に至れる頃は海面白み渡りて眞帆片帆の船算へらるゝやうになりぬ、鈴が森に驛路の馬の鈴の音も聞えず、松の下露に袖うち濡らしながら濱邊の石に腰かけて海上遙かに見渡せば、白ペンキの剝げしやうなる雲次第に消えて茜さす雲の破れ目より、天道樣酒に醉つてかひよろ〳〵とさし昇る、波は一面硝子の如く照り渡りて景色の好き形容するに辭なし、大森の入口には魚市ありてねぢり鉢卷せし男なんど勇ましく蕡めき合へり、腹空りたれば飯食ふ家もやと四邊を見れど一膳飯一錢と筆太に障子に書ける家ならで無きに、二人とも業を煎やして、よし〳〵池上まで辛抱すべしと空腹を抱へてやがて池上山の裏手へ出でぬ、朝靄松蔭に晴れやらず

して雲岫を出るの趣あるに、青田の稻に風そよ〳〵と見えて心地好きまゝ、光明館を餘所に見て山に登れば、境内よく掃ひ淨めて地に箒の痕波の形を印し、本堂に讀經の聲聞えて床しさ勿躰なさに口を噤ぎ、ねもごろに參詣しぬ。

七堂伽藍朝靄につゝまれて確とは判かぬ木下闇を步み行けば、衣したたかに濕ひたれど夜露ならねば心地いと淸々しぬ。ぐる〳〵と山の中をめぐり苔蒸したる塚などうち叩きては人の哀れを語り合ひつゝ仁王門に憩ふ、深草の元政上人が身延紀行に『やつがれは一日先だちて池上へ行てこゝろしづかに法文などを尋ねていたうふけて書院なる所に臥ぬ夜靜に心すみてしばしねられねば枕をさゝへて人生少ニ智音一、追レ師斯再尋、今宵池上月、依レ舊照ニ天心一』とあり、洵に都下に得難きの靈地なり、漸う門前に出れば楯を並べし茶店あり、今し起き出たりと

覺しくていづれ寢氣の姫百合の花、帶しだらなく締めたる下婢なんど
箒持てるもあれば釆配かくるもあり、近江屋といふ即席料理屋に入り
何ぞあるかと音信へば、いらつしやいませ能うお出でなさいましたが
料理は少々隙どりますそれでも宜しくば先づ此方へと二階へ案内する
に、心づいて時計を見れば未だ七時には四十分ゐ間のある程の早さ、
此分では即席料理も急には間に合ふまいと、弗と階の下を覗けば蚊帳
の手を一つ外せる中に五つ六つばかりの太肉の男の兒が摠煎餅攫める
まゝ餘念無く眠れる樣の愛らしさ、我等も寢くなりたれば肱枕して池
上山の景色を眺め應擧が描いた畵のやうだと賞むれば桃堂早くも熟睡
して鼾雷の如きに引かれ我もとろ〳〵まどろみぬ、眼を覺ませば清風
徐に來たりて單衣にては寒き位なり、緩々と酒を呑み腹をもこし
らへて其家を立出で、腕車雇ひて新田の社へ急がす、新田の社は八も

知る義興公を祀れる所にして祠古びたれど神寂びてたうとし、それよ
り十騎の社に詣で、矢口渡に出でたり、この川は玉川の裾なり、日頃
の雨に水濁りて甚だ清からねど、喉渇きたれば手もて掬ふて呑む、渡
口の小砂利に尻おちつけて渡りの舟を呼べど、船頭煙長閑に吹いて容
易來ぬに癪に障るとて、別に傳馬舟を雇ひ直ぐに川崎に行かんとぞ思
ひ、堤上の茶屋へ入りて舟を雇ひ、やがて小舟に乘りうつる時後ろに
喇叭の響す、それよ我が船を新田義興公と見誤り竹澤右京が詐討する
ぞ頓兵衞が娘お舟は居らぬかと顧向けば、四十五人の陸軍兵卒渡場の
邊にランドセルを下して水練を試むるなり、あら面白やと立たり居た
りうち騷げば、舟ゆら〳〵と搖めくに座つて御座れと船頭に叱られて
二人閉口しぬ、川は淺瀨と聞いて急に泳ぎたくなり、衣を脫で飛び込
めば桃堂も續いて這入り、泳いでは船に遲れ、水を潛つては前に立つ

を、恰度河童の水泳ぎのやうですと船頭惡口を云ふ、興あるに腹も立てず、「これ船頭、この淺い川で左中將義興殿はよく死なれたものだな」、と問へば、「昔しはモットと深う御座いましたらう、淵は瀨と變る世の中で御座います」、「はゝゝゝ違ひない、お舟に溺れた中將だもの」と笑ふ、川の深い所に至れば、舷に上つて背を天日に曝すなど、何うしても生蕃中の人物だと、桃堂我を冷評すを、また味噌を上げるかと突つ込む、談話途切れて想起す百年ばかり前の事、平賀源內といふ男、下宿屋の拂ひに困り、この矢口の渡へ駈落し、荒村の月夜遠砧を聞て一盃を傾けながら、神靈矢口渡といふ義太夫本を考へ出し、當時才名を一世に鳴らせりと聞くが、二人が今日の遊び事、源內程の錢儲けが出來ずとも、何か面白い新聞の種でも拾ひたいものと、商賣氣を出しては景氣の好いのも目に入らず、何時しか煉瓦製造所の前をも過ぎて

川崎の土手へ着く、土手を上れば近頃出來し海水の湯屋あり、我友某子大師河原の平間寺に浮世を感ぜし頃、この湯屋の板の間に、座禪を組みしことありと聞けば、寄らまく欲まれども、汽車の時間に急き立てられて無沙汰し、十一時四十六分笛の音に五尺の身躰を任して、搖られ揉まれて東京に歸へり、また編輯局に筆を舐る、知らず今宵の夢蝶となつて、蘆洲白沙の邊に到るや否や。

武藏野の夏

去年は白河の古關に散る花に面を撲たれ、松島の波に碎くる月影を見てしより、坐ろに風騷の情に堪えず、暇ある毎に三保、箱根、日光、鎌倉なんどぶらつきしも、一週一日の日曜遊び、鼓の恋から天井を覗

くやうな、せつかちな駈け巡りなれば、堂塔伽藍の壯嚴を見て、魂を消す田舍者の旅巡禮と同じけれども、さりとてヅツとしては居られぬ性分、旅といふも仰山なれど、今日の日曜日を猿樂坊の二階に送つて、いぢやないかと、牛肉屋の割合までも、權利義務で追拂ふといふ貧乏ソレは法律の見解を誤つて居るぞ、權利といふは左樣したものでは無法學生の議論を、朝飯前から聞のが厭さ、勿躰ないが七卿西竄といふ見榮で、一笠双鞋同行二人、玉川上水に吟膓を洗はんと、野田生といふ友人と共に、新宿停車場に押かける、先づ九段坂より合乘の腕車に乘りしに、この車夫五十何歳、よぼ〳〵歩みに玉のやうな汗を流して、楫棒を摑んだ樣子は、土佐光起が繪卷物にでもありさうな古風な人間、一時間半ばかりにて漸う着けば、急いで搆内へ駈け込みしに、八王子行は午前十一時何分なりと云ふ、未だ一時間あまりの隙あれば

茶屋に入つて休むに、白粉臭い姐さんが澁茶出すを見れば、東海道沼津邊に居さうな尤物、京の田舍は此處なりけりと、國分寺までの切符を買ひ、汽車に乘る、汽車中の摸樣宜しくあつて、境をも過ぎ、頓て下車すれば、車夫五月蠅も府中まで一里の間召しませと勸む、いらんと斷つて、テク〳〵歩き、途中犬に吠られ幾回か村の姉御に道を聞いて彼の稱名院が歌に「たのもしな世を祈れとて定めつゝ國を分てる寺の數々」と、詠みける國分寺に至る、この寺は天平年間行基菩薩草創する所にして、聖武天皇の勅願所なり、中興開山を敎心阿闍梨と申す、信心のお方は近く寄つて拜禮を遂げられよとは、緣起に詳かなれば云はず、藥師堂あり、境內寂びて尊し、二王門の二王尊は可愛さうに丸めた紙を投げつけられて、小楠公が四條畷奮戰の摸樣、矢數にしたなら、蜘の如しとでも申さんか、國分寺今は見る影も無き古寺なれ

ど、昔時の伽藍はなか〳〵大層なものなりしと見え、一二町を府中の方へ進めば、層塔の舊跡今に存りて、大きな礎が桑畑の中にあり、此地の古瓦は世に有名の物にして、瓦中に文あるものを得れば、尤も珍らしとて、考古家の珍重するものなれば、何とぞして左樣した寶を獲たいものと、畑中を駈けめぐるに、成程古瓦の破片はあれど、土産にするやうな奇なるものも御わせんね、底で以て眞一文字に府中へと駈ける、兎角して六社の邊に着いて候、急ぎ候ほどに腹は空つて候、茶屋は無いかと見廻す中、弗とした大寺へ這入る、山門あり、三文あらばお呉んなさいと、乞食が跡からついて來る、左樣なら差上けませうと、綸の財布の五十兩の中より、白銅一ッ取出して與へ、これさ端錢を遣せといふ、旦那勘辨してと足早に逃水をきめる、逃水は武藏野の名物夫木集に「東路にありといふなる逃水のにげかくれても世を過すかな」

と坐ろに哀れぞ催しける、腹は空たれど玉川まで行かば、名代の鮎もあるべしと頼み難きを頼み、一時過なれど其寺の後邊より田甫路を辿り、百草村の松蓮寺といふに急ぐ、この間一里半なり、小村二つばかり過ぎ、漸う玉川の岸に至るに、萱薄女郎花など生ひ茂りて、眺望一入好し、此邊を武藏野といふ由、草苅りの童に聞きて、北條氏康が武藏野記行の文を想ひやられぬ、「天文十五年仲秋の頃むさし野をみんとて（中畧）武藏野をかり行にまことにゆけともはてあらはこそ萩薄此年月思ひ立ぬることなれば人々あまたうちつれて小鷹かりして遊は女郎花の露にやとれる虫の聲々あはれをもよほすはかりなり「むさし野といつくをさして分入らん行もかへるも果しなければ」また僧西行が道の記にも『さしていつくを心さすともなければ月のひかりにさそはれてはる〳〵とむさし野にわけ入ほとにをはなか露にやとる月末こ

す風に玉ちりて小萩かもとのむしのねいと心ほそくむさし野の草のゆかりを尋けんもなつかしくやとをは月にわすれてあすの道行なんと口すさひて行程に』など記して、昔時よりこの野を物哀しきものに書きたるが、我もまた飢じき腹を抱て、世の中の味氣無きを感じ申しぬ。情を以て景を憶ひ、景によりて情を憶ひ、脆きは人の心なる哉と、瀧澤馬琴が穿ち顔に云ひし通り、好景骨に徹つて空腹も忘れ、玉川の砂利に腰をドッカと下して、一の宮の渡し場に彼岸から來る舟を待つこと凡そ二十分、漸う五六人の客を載せ、船夫奴が啣へ煙管長閑さうに喫つて漕ぐ、此方へ着けば入れ代つて同行二人貧はれて舟に載り、下されて急ぎ行く、早く松蓮寺の山に登り、百万石の田の面眺めんものと村に出づれば、熟した柿珠を綴り、この秋に枝頭錦を懸くるは、何うやら花咲かせ老爺でも居さうな眺め、前に万頃の田を抱えて有福さ

うな一抱への屋敷は、名主の權兵衛宅とでも云ふらむか、大敗けさせて遊ぶ子供等の傍に、飴賣が唐人笛を吹きつゝ、踊る豊年踊は江戸ッ兒の目にはいと面白し、漸う百草山に登れば、松杉茂りて、晝なれども虫の音あり、松蓮寺は維新後斷絶して無く、よりて苔蒸したる石段を登り、八幡宮の社内に至るに松古りて神寂たり、相傳ふこの八幡宮は康平五年源頼義義家奥州征伐の時、山城男山正八幡宮の神靈を移し、一宇の社を造營して勸請し、願書等を收めらる、其後凶徒平け凱旋の時再びこの地に至り、金銅の觀世音の像をも安置し、祭祀を不朽に傳へんとせし以來、源右府頼朝當社の神を崇敬なして、建久四年法華經を書寫し、金盞に入て奉納せしといふ、然れば境内の樹木枯るゝ後は、悉く奥州の方へ向て倒るゝことゝ、昔より今に至りて變りなしといふが不思議の至りなり、それより百草園の後山に登るに、二つ三つの四

阿に入り、四方を眺むるに、玉川の長流は眼下に落ちて、藍となり雪と砕け、鏡と照りて流るゝ様、これや調布の里ならねど砂利に懸けたる玉川晒、さても奇麗な水なりけり、拭つたやうな青空に、睡むげに見ゆる秩父の山々、出來秋に黄金敷いたる田の色は、民の竈の賑はひを見よとて、靡く水煙、漁舟泛べて綱打は、日野津邊の見當なり、さて當國の玉川は水源を甲州丹波山に發す、四十里あまりの地を這ふて、弦長く流れゆき、矢口羽田や川崎を過りて海に入るものゝ、別れからは水道の、管にかゝりて八百八町、隅から隅と渡り者、揉まれた故か角とれて、口に輕いは關東育ち、神田の兄哥が產湯となつて、伊達を磨くはさて豪らい奴、世はさま〳〵に開化して鐵道蒸汽電氣燈水道開いた德川様も、十五代目の將軍で、御代は一天萬乘の大君の在ます宮城と變つたものゝ、昔から水の流れと戀の路、變らねばこそ毛唐

人も英吉利人も、水道の水飲まぬはなし、我れも神田に住居して、ギヤツと生れた兄哥ぢやと意張る仲間に這入つた甲斐に、その玉川を見に參り候、まことや日本六玉川の一つと稱へられ、定家卿にも「調布やさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉川の里」と詠まれた無雙の勝慨、實に面白の秋のながめやと柱に凭りて四邊を見るに、彼方の柱に「骨法師」と銘打つたる墨の痕あり、近接つて檢分すれば、これは我友骨法師仔細あつて其の名は云はねど、しかも去年の春の暮、散り行く花に都を見捨て、檜木の笠に面を包み、世を憂しとてやこの玉川に來しことあり、其折渠が題せしものかと、床しさに堪えねば、我も一筆書き加へんにも旅硯無ければ、鉛筆もて「其朋來る」と書き添へたり、山を下りて茶屋に着き、名物の鮎は無いかと問へば、留守居の老爺揉手して、先頃の出水で漁は少しも無しといふ、シヤツたりと悔ても詮

無ければ、三年越の味噌漬大根と生玉子にて飯幾椀か滑り込ませ、それより日野へ罷るべしと急ぐ程に二ッ三ッの小村を過ぎて高幡村といふに至る、金剛寺といふ古寺あり、大寶以前の開創にして、弘法慈覺兩大師の再興なり、本尊は不動明王、堂宇は六百五十年前の搆造なりといふ、寺男本堂の一間にて護摩木を削り居て、東京のお方は成田の不動ばかりを信仰して、此處の不動さんを信心しませんねと泣言いふに、ハイ左樣ならと御免を蒙り、急げば早くも玉川の縁に出づ、此處には渡し舟無ければ、衣をかゝげて河流を漕ぎ越し、漸く日野に着いて、こゝより汽車に乗り移り、日暮れて東京に歸りぬ、四谷見附の三河屋で、名物の牛肉とお馴染になりしも、この時が始めてなりし、あなかしこ〳〵。

青梅八景

青梅の風趣豈八景に止まらんや、しかもその中より、八景だけを抜き取りたるは、近江八景に擬したればなり、近江と青梅と語呂やゝ似たり、語呂は似たれど、似ても似つかぬ石高道の、ごろつく中を同行三人、洋服打扮の身輕な拵にて、停車場を出る、この日は七の日にて、町に市立つ、予は例によつて、寫眞の機械を肩にかけ、姉崎文學士は乾板入の鞄を手に下げたり、只ある横丁を抜けて、御嶽道に出れば、山晴れて、水綠なり、道にて在廻りの太物商と連になりて、多摩川の畔に出づ、橋長くして、水淺し、向ふ側には竹の一村、藁葺屋根の三つ四つ見えて、駒曳き來る鈴の音は、水音よりもさやかに聞ゆ、川上の山も左までには嶮しからず、一帶の白砂、珠玉よりも美くしく、下

手に水車二三あり、村の若者打寄り居て、米を精げゐる態の面白き、予は忽ちその水車小屋に攀ぢ登りて、三枚ばかりを撮影し、そこにて荷を負ふべき村男を頼み、勇を鼓して吉野村に向ふ。村男に橋の名を問へば、調布の青柳橋と答へぬ、村に入り、村を出で、只ある橋のたもとに至るに、物古りたる掛茶屋あり、三人齊しく物欲しき折なれば、床几に腰うちかけて、名物の饂飩を喰ふ、名物なればにや、太くして長きこと五六尺、箸にからげて、引ツ張る樣の興ある、舶來の彌次喜多乎たり、坂を登れば梅花あり、花は見頃なれども、横に見て萬年橋に至る、崖より崖にかけたるにて、渡るに眼も眩みぬべし、川原に下りて、見仰ぐれば、實に蒼晏雲無きに何の龍ぞと怪まるゝばかりの構造、橋板朽ちて、馬渡るべからず、折ふし柴負へる村の女の、來かゝるなど、夢の棧とはこれなるべきか、水清うして、山青かり、中なる

人も畫の如く、その景色の興あるに、我を忘れて行むを、畔柳文學士に心づけられて、また吉野村に行く、途に即成寺の門を叩き、御嶽の入口より梅を探ぐりて、畠中を辿る、日和かに空晴れたり、花に此方寄れ、蝶々は無いが、中の一人の二重外套に、ゴム靴穿ける姿は、揚羽の蝶とも見られたり、梅は一村江南の地より咲いて、藁家も匂ふ白粉の、花の吹雪に埋まりぬ、また行いて澤井に出づ、そこの棧を渡るに、多摩川の眺望一入よく、流をこゝにては戰場川といひ、村の小名も鎧などゝいふを聞けば、何時の世にかの古戰場にや、二又尾にて晝餐食ふ、飯を面桶に盛りて、名々の前に出す、肴無ければ、油揚の煮付に腹を癒して、その家を出づ、下村より歩を急ぎて、青梅五番組に着く頃、午後より曇れる空合の、はや降出しぬ、汽車を待つ間、何とやらいふ料理屋にて、一酌するに、怪しの女交る〳〵出で來て、酌す

べしなどいひつゝ、媚を送るなまめかしさ、隣室には在廻りの役者連の、酒に亂れて、果ては臺辭交りの喧嘩するあれば、マンマと寶藏へ忍び入りと冠句つきにて、他人の皿の物を摘み食ふもあり、その亂痴氣の騒ぎに吃驚して、三人停車場に駈け込む、時に暗中より我が名を呼ぶ男あり、誰ぞと見れど、知る人ならねば、訝かりて立つを、その人は懇ろに一禮し、我は當停車場の驛長なり、先刻國分寺驛の鵜澤四丁氏、後より駈付て、君等の行衞を捜したりしも、遂に遇はずして、空しく歸りたり、若し斯く〳〵の人に逢はゞ、都鳥ならぬ都の人に、今日の始末を傳へよとて、いと殘念の樣子なりしと語らる、予は赤面して、その罪を詫び、さて汽車に乗る、夜十時、無事歸宅、めでたしめでたし。

杉田梅見の栞

この二三年は花神に魅られけるにや、香を趁うて栩々たる胡蝶の如く、春立ち初むるあしたより、兎角は花に浮かれ、月に嘯きて、旅寢の夢を結ぶこと多かる程に、隅田小金井の櫻も妙ならずと、去年の春は吉野初瀬の勝を探りて、京攝の間に優遊すること二十日あまり、大和路の山また山を別け入りて、月の瀬に梅を尋ねたるが、こゝは世に名だたる名所とて、山水の風景畫も及び難し。されども花期に少しく遲れたれば、羅浮仙女が朧月にそゞろ歩くさまを見得ざりしは遺憾なりし。今こゝに杉田梅見の栞を記せるは、特に愛讀諸君をして、花落鳥空歸の慨み無からしめんが爲め、二十四番の風に先ちて、行樂の意を促さしむるものなり。

杉田梅園は關東の名所なり。地は横濱を距ること二里に近くして、一里に遠し。海路を行くには、横濱車橋より乘合舟に乘るを好しとす。去年如月の廿二日、その舟にうち乘りて、根岸の堀割を出づれば、梅見船幾艘と無く往來して、春の海に鷗の群れ遊ぶが如く、往くものは酒の香を匂はせ、歸るものは襟に梅花を挿みて、源太が風流を擬ねたり。見かへれば本牧の鼻は白象の立てる如くなれど、普賢菩薩に見立てべき別莊の西洋風なるを如何せむ。波は緩もて熨せしよりなほ穏かに、旭日の映りて風に砕くるは、乙姫の花簪をこの沖より龍宮城へ輸出するにや、遠く岸邊の方を眺むれば、馬車を驅りて疾風に乘ずるもの、喇叭を吹て足並を調ふる田舎教員の生徒を連れての遠足も、離れて見ては行軍演習の歸途とも思はれたり。船頭て杉田の波止場に着く、直に梅園に至り見るに、枝頭已に七分の春を彩ると妙々、頗る妙、花は半開、武者は樊噲と、先づ門を押して妙法寺の境内に入れば、本堂の脇に珠簾梅と標札の立てある老樹あり。枝長く垂れて美人の洗ひ髪を日に晒すが如く、早咲きと思はれて花は大抵咲き揃ひたり。寺の前後は一面の梅園にて、いづれも古色蒼然たるものゝみなれば、龍の蟠れるが如きもの、虎の臥すが如きもの、青苔滑かなる地を染めて、落英霜を置くに似たり。花誘ふ嵐の庭には葭簀張の掛茶屋ありて、名物の漬物を賣れば、入りて床几に腰うちかけ、澁茶を啜り、花漬を一曲買ふて茶屋を出で、石段を登れば、祇園社と扁額を掲げたる古宮あり。後邊の山へ登らんとするに、古き新らしき石塔の崩れたるあり、未だ香露の消えやらぬ新佛の土饅頭などある中を通りぬけ、山に登りて芝草の上に足を投げ出し、麓の方を瞰下せば、海凪ぎて天蒼々たり。蓼太の句に「梅が香にはらふくるゝや帆かけ船」とは、よく杉田の勝概

を云ひ盡せりといふべし。山を下り茶屋東屋にて晝餐したゝめ、吐月峯に登るに此處は一入眺望も麗はしく、見渡せば三々五々のかけ茶屋は、紅白の幕を張りて、酒旗を高く掲げ出せり。臘々と霞みわたれる梅園は、岫を出づる白雲の凝つて動かぬ形をなし、醉顏朦朧たる人の袂には、濱風絶間無く吹き來りて、花の下に香を慕ふ蝶も飛ぶめり。遠く蛾黛の眉を畫くは、房州木更津の山にして、三浦三崎は天の通路いと迥かなり。白砂に網干の君あれば、濱路を辿る娘もあり、犬塚ならぬ庚申塚の邊には、漁舟維いで、春柳煙を吐く。其景、其趣、恰も明人の山水圖に似たり。唐人の囈語に、行盡江南梅一村とは穿てるものなるかなと、且つ賞し、且つ歩して、薄暮東京に歸り、一曲の花漬を味ひて、東窓月下に、古人の文を誦すれば、恍として尙ほ香霧の中に立つの思ひあり。

晴好雨記

江南に一枝を折り、一句を科する約束にて、梅見の會は成立ちぬ。時は三月第一日、春は未だ深からねど、暗香疎影の相合傘に、お約束と駈け出す半玉の、水に芽を吹く柳橋には、ねだられて屋根船を用意する、紳の字の黄昏月を乘せて、歸來の遲きを咄つもあれば、草鞋がけの遠足に、柄に無い豆を蹈み出して、曹植が七歩の、詩や歌どころでは無く、汽車にせうの歩かうのと、五十歩百歩を爭ふ書生もあり。この陽氣さには、文士もとより鐵羅漢にあらず、我も〳〵と連判に加はるもの、編輯局ばかりにても、二十有一人、その上客分として招待せるは、紅葉、眉山、柳浪、水蔭、思案、風谷、廣業の諸君なり。此分では申込み、無慮一百名には上るならんとの、當事は翌朝の寒さに外

れて、さら〳〵と白いものまで降つて來る。この空ではと危みながらも、新橋に駈つけしは、八時には未だ四五十分も前なり。

さても浮世の約束事は、懸直ありと知るべし。赤穂の藩中にても、いよ〳〵となつて、仇討の連判に加はりしは、僅に四十八士なり。我が會員も、絹篩にかけての今朝は、風袋引いてタッタ十二名、乃ちその人を特筆大書すれば、お客分の眉山、柳浪、思案、廣業の四君と、水哉、漣、桂舟、幻堂、鏡花、葦舟、一舟の七氏と、技師の拙者なり。

技師とは如何、寫眞機械を肩にかけて、寒さに顫へながら、諸君の後に扈從する所、玄鹿館の番頭さんとは、好い見立なる。

八時五分、新橋を出づ。急行懐中に入るなぞと、思案君の洒落もあつて、横濱に着く、東道主人は拙者、斯う來たまへと、先に立たれば、三四年前とは町並も違ひ、路の程も判らずなれる儘、辻にて問ふこと

三度四度、漸く車橋にいたる。鏡花後れて追ひつく、その故を問へば、われ下駄の鼻緒を斷り、二の口村を演じたれど、同行の士に梅川の信切無く、孤獨を棄てゝ遠く去れり、噫世も澆季なるかなと溢す。それでこそ船頭が足元を見たるなれ、諸君下駄穿きの故を以て、船賃は不斷より倍增にとられたるぞ、いざ進めよやと一發の號令に、一隊を二艘に分けて、名々樽の鏡を抜くなど、何う見ても、流石は江戸ッ兒の勇みなもの、古い句に『江戸をもつてかゞみとすなり花に樽』とは、宗因が此邊から割出した穿ちなるべし。舟の根岸の堀割を過ぐる頃には、いづれも醉ふて、花は眼にちらつき、顔華井底に眠る趣あれども、韻脚を陷落さゞりしは仕合なり、叙景は云はず、景色歩々一變す。漣は舷頭に跨つて、船頭何堪今夜情を吟ずれば、龜さんの柳浪子、得々然として前夜の豪遊を誇る。思案は大語し、拙者は笑ふ、お向ふの

舟には、鏡花舟に醉ふて、色青菜の如く、眉山シヨゲて、油揚を鳶に攫はれたる人に似たり。杉田沖にて暴風驀然として至る、一同船頭の肩に負はれて、陸に上る所などは、畫師の筆に讓りて、別に評せず、蓋し馬鹿〳〵しければなり。一同は色氣よりも、先づ食氣だと、梅を見ずして東屋に入り、酒ぢや飯ぢやと、名々腹をつくる。食に飽いて花を見れば、今が恰度まさかりにて、雪の一村、濱風ぬるく、清絶奇絶、氷魂骨に入て、拙者も亦寒からんとす。寺あり、境古く、梅多し、其處か此處かと、寫眞機を据ゑつけて、商賣の種板を、空虛にすること〳〵少々ならず。門内の床几に中學校の生徒にや、十六七歳ばかりなる少年七八人が、頻りに句を案ずる躰片腹痛し。如何に流行なりとは云へ、これからが出世の花を咲かすべき若いものが、梅が香やも情ない、何故本牧沖の測量でも試みぬか、ボート航行でも企てざるか、宗匠で

飯を食ふ氣は不了簡なり、一句浮ぶ『梅が香やなど〳〵若いのつがもねえ』お向ふの旦那、何とか賞めて呉れ賜へかし。斯くして三十分も見歩けば、花に魅せられて、酔も醒め、水涕も出る。いざ鎌倉行の段となれば、眉山、漣、桂舟は裏切して横濱に歸りぬ。是に於てか、一難を經る毎に一倍し來れる九人の勇氣は、陽炎となつて天にも昇るべく思はれたり。吐月峯を横に見て、富岡に出づれば、其處の谷間、彼處の流れに、野梅の白きが、青き山を彩りて、海の水の淺黄色をも取合せたり。されども路は嶮しくして、酔後の歩行に便よからず。柳涙子初めに弱り、拙者次に閉口す。寫眞機は仁ある君に依頼して、身輕にはなりたれど、滿腹の重きを奈何せむ。稱名寺の門前に出づ、その景色奇と云はんか、妙と云はんか、金澤の町は荒れに荒れて、蠣売の路に白きを見するのみなれど、漁村の風光、畫も及び難し。漸く瀬戸に

着き、東屋にいたるに、思案、鏡花二子先づ一同を待受けたり。それより亦酒となり、雜談となり、寫生となりて後、議は陸を鎌倉に行くものと、舟にて横須賀に赴くものとの二つに分る。水哉子、鏡花子は、逸早く鎌倉に去り、殘る七人は舟を瀨戸に泛べて、横須賀に向へり。日ははや暮れかゝる、舟には茶あり、巨燵あれど、天は漸う寒くなれり。七人は一枚の布團を引張りて、また雜談に威勢を見すれど、雲低く垂れて、雨か雪か來らんとし、風荒しく吹き出でゝ、波大に高まりたり。夏島を左に見、烏帽子岩を右に見て、一段の瀨戸を過ぎんとする時、本牧の鼻は靄に隱れて、天地は鎖せる如く、鼠色の雲に包まれぬ。それ雪だと、一同外套の帽子を被れる折には、紛々たる風雪、斜に舷頭を擲つて、その凄さ窮なし、雪も一トしきり、風變つて雨となる。變幻玄妙の天色、面白しといはんよりは、小氣味の

悪き思ひしたり。舟は横須賀灣に入る、吉野、高千穗、鎭遠、磐城などの諸艦、冬籠りの躰は、帆柱の枯木立を見せて、千鳥の飛ぶ樣、烏のとまりけりと云ひたき景なり。吉濱にて陸に上り、停車場に着きたるは、六時を過ぎて片明なり。その四十分汽車に乘りて、横須賀を出づ。途中横濱を過れば、天晴れ、月出でゝ、水色一層の美くしさを添へぬ。夜は八時を過ぎぬ。窓を開きて天の一方を望めば、圓々たる月は今し雲に隱れて、斷片に光を包み、波に影を落したり。鈴が森のばら〳〵松は、茅葺の百姓家と共に、海を脊にして其影黑く、燈火の闇より洩るゝは、破窓に苧を紡ぐ老媼あるべし。前なる蔦頃の田には、水饒かに度りて、青き白き灰色なる雲の姿を映し、月の在所をも知らしめたり。この清き風景、好畵題なり、油繪にせば、如何に風情あるべきか、汽車新橋に入る、二三相集り、小酌一番して歸家す。この日

此行の一日の中に晴雨あり、雪月花あり、山盡きて水出づ、而かも淫せずして、自ら樂みに淫せるもの、若かず巨燵にもぐり込んで、好きな小説本を讀まんには。あア風流は未だ寒いものと、晴好雨記に一句を餞す。

短冊に水涕すゝる梅見かな

柳の都

夏草や強兵どもの夢の跡と、相州鎌倉の地、實に斯般の慨みあるなり。國滅びて山河在り、城春にして草青みたり。白旗山頭の松風、千古颯々の響あるも、當年汗馬の跡、茫として探るに由なく、正に是れ城南に行かんと欲して、城北を忘るゝの狀あり。予去年雪の下の農家に宿す。茅檐月傾きて秋草淡く、冷風簾を敲いて燈火絶す。天明けて匹馬驛路に嘶き、廢寺菊凋んで梵鐘鳴る。奈んぞ孤客の腸を傷めざるを得ん哉。今年今日また此地に遊び、長谷山下に客たる二日、閑窓文を行りて、卿か青山白水の靈に酬ゆるものなり。

時維廿五年八月廿七日黄昏、友人茶山子と共に鎌倉に向ふ。途上横濱に於て日全く暮る。鐵車戸塚を過ぐ、眉月松蔭に隱れて、山影模糊、景色恰も畤繪の如し、漸くにして鎌倉に着す。腕車を驅て長谷の三橋に到る、主人我等を貴公子と誤認し、鶴の間と稱する十六疊の別室に入らしむ。二人も亦俄に紳士の假面を蒙りて、應對言語頗る豪放なり。一浴先づ海邊を逍遙す、眉月未だ全く沈まず、餘光海を照らして金蛇閃々波に躍る。稻村が崎突として波間に聳ふるは、名匠の丹青を凝せる畵屏を披くが如く、油井が濱の松濤颯々として釣磯を吹くは、

天女の樂を奏するに似たり。良らくありて潮邊に馬を洗ふの農夫が、卑近の俚歌を驅ふて詩人を氣取るを見る。歸途海濱院の傍に出づ、二人草間を高踏して、虫聲を歇めんことを恐れ、月下徑を求めて步を移せば、白露點々、衣裙の濕ふあり。寓所に歸り柴扉を押して、裡門より緣に上れば、濤聲と虫吟と交々臻りて、仙境に入るが如く、身亦羽化して七賢と碁を圍むの想ひあり。痛飮半夜、酒間詩を題し、歌を詠ず、翌終日淹留、夜に入り歸京す。

逗子の避暑

血氣さかんな時は、兎角冒險の精神が多い。その冒險の氣象も、山を攀ぢ水を涉る時に於て、最も多く起るのであつて、人間誰しも山に在つては山を憶ひ、水に在つては水を憶はぬ者はない。さればその境遇の如何によつては、その思想も違つて行き、所謂門前の小僧習はぬ經を讀む、諺の通り海邊に住めば自然に舟を操ることが上手になる。今年の夏は相州の逗子に暑を避けた。否、暑を避けたといふよりも、寧ろ日に焼けに行つた。河童の子ではあるまいし、朝から晩まで、海水に漬つては、熱沙で膚を温め、そして背を烈日に乾かして居る、これが何うして避暑といへやう。一週間ばかり經つた時は、手も足も顔も炭團のやうに黑くなつて、唇は赤く、眼の白いのみが、僅に日本帝國の人民らしく見えた。

同行の男は誰、しかも活潑にして無爲に化する事を嫌ひな今年十一の小兒である、否、少年である。名を進と云つて、退くことの嫌ひな勇ましい兒である。で、將棊や、碁で作戰の稽古をする時などは、頗る

面白い。飛車手、王手などゝ云つて敵を攻むるにも、旅順口だ、（平壤だなぞと名をつけて、突貫を試みたり、斥候を出したりして、無心に駒を運轉する。斯う云ふ工合に、將棊をさしたり、碁を圍むのである から、頗る勇ましい。或日の事であつたが、挾み將棊をやつた時に、何うした拍子か、少年の駒を殆んど鏖殺したから、やア北洋艦隊全滅だと云ふと、突然僕に向つて來て、負けやしない、サア相撲をとらうと、喰つてかゝつた。その活潑、快濶、少年は斯うでなくてはならない。

或時二三日降り續いた雨が、昨夜の中に霽れて、風凄まじく、怒濤岩角に中つて碎くる音も、曉の空と共に收まつて、引汐の遠淺、二三町が間は、徒歩渡りされるやうになつた。見渡せば、南と北との崖は、この濱の關門でもあるかのやうに見え、生ひ茂る若葉の露に生氣を添へて、緑の色が滴りさうに思はれる。近く海馬の波間に立つが如きものは何？　鬚の邊と思はるゝ處に、人家が微に見え、尾と疑はるゝ邊に、尻懸のやうな黒い岩が見えるのは。それは繪の島である。その奥方に青く長く濃く隈を曳くものは、相駿の連山で、その上に富士の山が、雲を磨して、白く裾を投げかけて立つて居る。海は波が熨すやうに穩かで、白帆を上げた船、櫓を押す漁船が、片々葉々、泛ぶが如く、散るが如くに、光る波の上に見える。ア、斯の絶景に對して、快絶的壯遊を試みざるを得んやだ。よし〳〵あの北の斷崖を度つて、鎌倉まで行かう。山を越しても二里に近いと聞く、この崖を傳ひて行かば、恐らくは一里半か、二里よりは近からうと、心算目算、單騎島めぐりを始めた。

恰も好し、潮が引いて、崖際の深さは膝の邊までしかない。されど滿

潮の時は二三丈の深さがあるものと見え、巖石に波痕の筋が幾本も曳いてあつて、その筋の下には、船蟲と小さな蟹とが算へ盡されぬ程居る。崖を渉り波に入りて、只ある瀧の下に出た。其間には二三の獨木橋もかゝつて居て、その瀧の下までは、村の者も來ることがあるらしく、細い道の形がある。折から瀧の上に女の兒の聲がする、仰ぎ見れば十丈程高い崖の上に、小さな社があつて、白瀧不動尊といふ樂書が、祠の柱にかいてある。諧で果てゝ、松の間より葉山の方を眺むれば、逗子はモウ崖の陰に隱れて見えず、彼方は長者ケ崎の方まで見えて、その景色の好いこと、何んとも彼とも云へない。その女の兒の聲する方に進み行き、野草の上に寐轉びながら、子守唄を謳つて居る女を見かけて、鎌倉までの道を問へど、知らぬと云ふ。知らぬことはない、敎へてお呉れと云へば、手に持てる山百合の花を投げて、その投げた方

が道だと答ふ。怫然としてまた崖際を行けば。ア、危嶮い、今に潮がさして來ると流されて仕舞ふと喞けるを攀ぢて、弗と後邊を振向けば、こは如何に、葉山も見えず、舟もなく、たゞ突き出でたる崖と崖との間に身は圍まれて、怒濤山の如く脚を掠め去らんとする。もう滿潮の時刻になつたかと、驚いて山に登らうとすれど、斷巖刀もて削るが如く、仰ぎ見れば、膽の寒きを覺ゆるまでの嶮崖が、雲となつて吐嗟頭に潰れかゝらうとする。進退維れ谷まつたが、此處で立往生をする位なら、進まれるだけ進んで見やうと、また一つ崖の角を廻らうとする途端、岩から足を辷らして、波の上にザンブと落ちた。が、幸ひ海が深かつたから、怪我もせず、泳いでその岩角を通り越せば、いと廣々とした磯邊に出た、崖の上の磯馴松が青く、岩は一面疊のやうである、漸く泳ぎついて、岩角にかぢり

つき、上らうとすれば水苔に辷つてズル〳〵と落ちた。これではならぬと精一杯の勇氣を振つて、漸く濱邊に上つたけれど、家もなく、人も居ずっ松の嵐と波の音の、寂寞として僕の身に迫つて來るばかり、罪無くして配所の月を見るのかと、坐に心細くなつて、只茫然と岩の上に兩足を投げ出し、手を叉んで考へた。が、斯うして居ては益々時刻が移つて、滿潮の刻にも間があるまい。今一層の勇氣を皷して、人住む島になど着きたいものだと、麥藁帽子の緒をしめ直して、また進み行けば、遙か向ふの山に薪が高く積であつて、小川の流れが崖の間から、瀧になつて落つるのが見える。あの薪、その小川、顧ふに人里が近くにあらうと、崖を這ひ、淺瀬を泳ぎ、また一つの出ッ鼻を越したが、行けば行く程海が深く、崖が高くなる。が、已に薪と水とによつて、人里の近くにある事を悟つた以上は、何程の事があらうかと、

コロンブス始めて島影を認めた時のやうに、雀躍して進んだ。此處に來た時は、江の島も見えなければ、勿論三浦三崎の方も見えず、習々たる濱風のみ、我物顏に白波を躍らせて、僕の魂を奪つた。僕も此時は半ば嬉しいやうな、半ば失望したやうな、妙な氣になつて、崖の下に尻餅を搗き、見たくもない海を眺めて居た。

折から彼方の波間から人魚が躍り出た。驚きながらも眸を定めて熟く見れば、人魚でもない、鯨でもない、乃至河童でもない、人間である。が、色は鐵よりも黒く、眼は明星よりも光る十三四才の漁童が、波を潜つては海藻を捕り、浮び出でゝ鯨を捕るのである。彼方でも驚いたか、波の中から首を出して、僕の方を見るや否。ヤア人が居ると泳いで遁げやうとする。此處で渠を見失ふては、道案内を頼む者がないと思つたから、聲を上げて呼んだ。僕の聲を聞きつけてや。ナニ人が居

ると訝かりながら、三人ばかりまた岩角を泳ぎめぐつて出て來た。僕の嬉しさ、何んなであつたらう。諸君察して呉れ給へ。

四人の漁童齊しく僕の傍へ泳ぎ着いて、お前は何うして此處へ來たと問ふ。流されて來たのよと云ふに、僞とも思はぬ樣子に、得たりと附け入りて、道を敎へてと賴めば、何錢呉れると云ふ。錢を遣らねば案内せぬかと問へば。さうだ。鰻を捕れば一尾二錢づゝになるから、案内は出來ぬといふ。然らば五錢遣るべしとて、先づ錢を渠等の手に握らすれば、喜びて道を敎ふ。漁童腰には二三尾の鰻を挾み、手には叉槍を持ち、樽の上下ともに底無きものを携へり。これぞ藻に潛み、淵に隱るゝ、鰻を捕ふる器にして、その桶の如く、樽の如きものを水にあてゝ底を眺むれば、魚族の遊ぶ樣は歷々として讀まれる。で、叉槍はその上より突き殺す道具である。此邊の光景、到底都近き處では見

られぬ面白味であるから、僕も苦惱を忘れて、鰻捕にかゝつた。が、なか〳〵獲られない。淺瀨〳〵と海を渡つて、一二町も進んだが、懸崖高く雲を磨する角を出離れると村が見えた。ア、終に人里に着いたかと、小閣龍先生頗る得意の顏色を呈した。

四人の漁童はこれが小坪村なんだ、鎌倉の材木座へは四五町しかないといふ。兎角して濱邊に着いて、その四人に別れ、鎌倉へ行かうとしたが、別に逗子へ行く近道があるといふ嶮岨を越して逗子へ歸つた。

小坪といふ村は漁家五六十戶、白沙の平な處へ網を干してあり、山に據りて建てる藁屋、濱風を獨り占めの夏景色は何うも繪にも書けない。浦島が子も斯ふ云ふ土地で生れたらう。海國思想を養ふには、海水浴などは頗る妙だと、進といふ子と共に快談して居る處へ、東京から愛

する友の來たので、誇顔にお饒舌をすると、實に君は小閙龍だよと冷評した。

横須賀の夏月

七月七日早起、吾妻掬翠子と共に相州横須賀に赴く、この行や軍艦秋津洲號の進水式に臨まんと欲してなり。汽車鎌倉に着す、進水式の時刻に尚ほ早きを以て、此處にて下車し、雪の下の旅店丸屋方に憩ふ、去年中秋前田香雪吾妻掬翠二子と同じく此家に飲し、荒村の月夜杯を擧げて、虫聲を聞けることあり、今年亦此樓に登りて、綠陰に涼を納る、快云ふべからず。

午前十一時汽車横須賀停車場に着す。灣口の艦艇、滿艦飾をなして、旗章潮風に翩飜たり。直に腕車を飛ばして馬場新八氏の寓所を訪ふ。氏は羽前米澤の人、明治の初年笈を負うて東京に來り、切磋勗勉、學成りて今日海軍大尉大主計兼造船工學校長の榮職に居る。此日接待委員の一人なるを以て、早く已に鎭守府に在り、予輩氏を尋ねて工學校に至る。此時　聖駕鎭守府に着御あり。午後二時艦右の棧敷に於て、進水式を拜觀す。了て製圖所の樓上に立食の饗を受く。後造船所部内を縱覽し、目下修繕中なる橋立、及び嚴島等の諸艦を見る。

薄暮馬場氏の寓所に飲し、手を携へて市中を散步す。歸後浮嚢を携へて灣口に海水浴を試む。此夜月明に風清く、海穩にして金波熨すに似たり。掬翠子も予も甚だ水術に拙し。馬場氏笑て曰く、山中の豎子何ぞ海を知らんやと。蓋し三人奥州の山中に生れしを以て云ふなり。生地米澤は四面皆山にして、雲近く海遠く、夏時潮水に浴せんとする

には、少なくも四五十里の遠きに行かざるべからず。是を以て人多く海を知らず。掬翠子便々たる腹を叩て曰く、予輩豈之を知らざらんや。馬塲君盖し記臆すべし、幼時君と七夕の月夜に乗じ、松川に水に戯れしを。河と海とは潮流に大差あれば、河に巧みなる者と雖ども、時に或は海に拙ならざるを得ずと。三人相顧みて一笑す。山海の夜色、眞に一幅の畫圖を披くが如し。嗚呼この七夕の瓦夜相與に天涯に會して舊事を談す、豈亦愉快ならずや。米澤の俗七夕の夜河水に浴する時は終歳時疫に感ぜずと稱し、河邊に相集りて簀を焚き、幕を張りて、終夜交々水に浴す、今も亦異なることなし。これ七月七日には、牽牛織女天河に藥水を流すと唱へてなり。其他竹葉に短冊を結びて、河水に棄つるの古式も、今なほ盛に娘子の間に行はる。是啻米澤のみならず、各地大抵然り。獨り東京の俗王政復古と共に、叨りに舊式を排斥して、

思ひを新奇の事物にのみ走せ、今に及んで七夕の古式を行ふ者殆ど稀なり。我は思ふ舊時の年中行事中、害ある者は却けて採らざるを宜しとするも、しかも優美にして害無き者に至りては、採りて以て今の式目に加ふるも、敢て妨げ無しと信ず。今若し弊害の點よりして儀式を退くるものと云はゞ、舊事古式のみに求めざるも、西洋新奇の遊戯にして、害多く益少なき者いと多からん。啻に唱歌と舞踏のみを以て、貴女令嬢の快事と定め置くが如きは、予輩の尤も厭ふ所なり。予輩は七夕の古式を再興して、今の婦女子に一の快事を增さしめん事を願ふに切なるのみ。馬塲氏に歸り、三人寢に就く、翌朝亦海水に浴す。午前八時汽船に搭して、正午東京靈岸島に着す。

箱根の一夜

木佛金佛の如く、その鐵も鎔けなんとする暑さの中を、堅く行ひ澄したる行人編輯の大一座、車座に居並んで、避暑懇談會々場を、其處か此處かと評議ある。末座に扣へたる某威猛高になつて、夫編輯は扁舟なり、宜しく水邊をお選みあつて然るべう存ずるといへば、上座の御家老首を振つて、イヤ〳〵それは成らぬ。編輯の○○の字は、偏袒右肩の○○なり、字義變人のへんに同じ、大磯鎌倉なんどの水邊、豈この變衆を容るゝの餘地あらんや。如かず偏袒右肩の平民主義を執るの優れるにはと。甲議乙駁、評定は兎角小田原なれば、ブラリと國府津まで出かける事に、一同兩肌を脱いで贊成したれば、君も一肩入れて、館主に經費の補助を歎願し呉れ玉へとの事にグッと呑込み、願意聞屆の墨付に勇み立ちつゝ、一行十六人、八月廿一日午後一時四十分の汽車に乘じて、小田原へと押出したり。國府津にて右肩黨勝を制し、水邊黨の根據地なる酒匂も過ぎて、湯本に馬車は着きにけり。急ぎ候程に塔の澤なる環翠樓鈴木方に無事の安着、先づ座敷をと檢分するに、その繁昌、立錐の空間とても無き中を、他樣ならねばと、八疊二間、六疊二間を明放ちて、十六羅漢を安置し呉れぬ。浴み果てゝ浴衣一つの偏袒右肩、萬事は思ふ儘になつたと、其黨の喜べば、ヤ、よりは酒のこと〳〵、妙な處に水邊を利かして、負惜みを云ふも可笑。日落ちて水闇に白く、虫鳴いて山影朧なり。こゝに狂ふ幻叟あれば、彼處には浴罷で欄に凭る西施あり。前に華清池の雛形あるに、景色は曉山に勝るといへり。景色が好くて、座敷が好くて、そして料理も好いと來ては、人も十二分に醉はざるを得ざる譯なり。醉ふこと三分、膝先

つ頽れ、次に張肱頽れ、續いて一座頽れ、酔ふて圖分六に至つて、玉山將に頽れんとする時、愛嬌者の新谷來りぬ。渠は盲者なりといへども、人を見るの眼力は、目明きに優れり。曲曳きの三絃に人を浮かせて、妙に座を賑はす程に、鐵羅漢も竟に浮かれ出して、銘々持前の藝を演ぜる後、また湯に入りて、ぞろりと天窓を並べし寢樣は、野戰病院とは悪い洒落なり。一夜明くれば賑かで、お飾立たる別嬪が、散歩と名づけて出掛けるあれば、髯武者の紳士が女物の浴衣を召して、意氣揚々たるもあり。かゝる中より水哉、幻叟、絅齋、如水、天溪、葦舟、蘭雪、不染の諸氏は七湯めぐりを企て、紫山、青軒の二氏は一同に別れて去り、殘るは小波、竹柏、愛軒、梧樓、義舟と予の六人のみ。一日を按摩と寫眞とに暮らしたるは殘念なり。勿論この朝奥田柘殖務次官と、湯本に散策を試み別れて玉簾の瀧に至りしかど、折ふし見料

拂ふべき財布持たざりしため、その音のみを聽きて空しく歸り、次に草雲寺に入りて、古書畫を見て歸りたるのみ。終日無事、閑暇ほど苦しきものはなしとて、薄暮汽車に乘じ、また一行と別れて、我は大磯に館主の令息の滯留しあるを訪ひ、この夜は風雨と怒濤の咆哮するを聞きて眠りぬ。翌朝は雨霽れ風も凪ぎたれば、日の未だ昇らざるに海邊をそゞろ歩き、汐風に吹かれながら、汀の石に腰うちかけて眺むれば、鳴立澤の杜は近く、江の島は遙かなり。青松白沙、須磨舞子の勝に及ばざれども、朝嵐清爽、懷を快うするに足れり。食果てゝまた汽車に上る。信綱君は昨夜西男爵の家に宿り、この朝我を停車場に見送られ、進一君もわれを送りて、柵の外に立つ。汽車の煙過ぐる所に、殘月白く消えて、影は朝の靄に隱れ了んぬ。蘂澤にて機關車能力を失ひ、新に横濱より取寄せて、我等の列車を曳かしたるなど、彼是三時

間ばかりも遲れて、京に歸りぬ。二日の紀遊、例によりて例の如し。

熱海の冬

去年の冬、しかも押詰つての三十日、煤掃きも清まし、門松の用意をも片付けて、いざ待たるゝものは元日の雜煮餅のみだが、これも明け ぬ中から、來年の事を云ふと、鬼に笑はれると度胸を据ゑ、一年の計を留守居の書生に任せ、懷手して家を出た氣樂さ、先づ華族の馬鹿殿といふ御資格だ。

大晦日の羽を伸す季違ひの掠鳥、嬉しい哉、編輯局の紙屑籠の目を拔け出でゝ、大繪津の奉加鬼のやうに、茫然と相州小田原へ着いたのは、午後三時である。其處から綱曳きの腕車を雇ひ、伊豆の熱海まで、一

目散に走らせた。日は石橋山を過ぐる頃に落ちたから、頼朝公の古蹟を訪ふ遑も無く、舊暦十三四日頃の月あるを的にして、繪の浦といふ村に着いた、そこは海邊の孤村、漁家は三々五々、白沙青松の間に點綴して、炊煙の立昇る樣など實に繪の浦だ。嗚呼詩だ繪だと、僕は唯嬉しくなつて、山路の嶮、夜道の難儀などは一向平氣。先づ夜食を茶屋でしたゝめ、また車を飛ばして行くに、月は海を離れ、初島の奥を出でゝ、朧面も無く海一杯に冴え渡り、風に碎ける波、嵐に墜さるゝ松の露、みな金泥か銀粉かと思はれる。底で一句やつた、曰く、

明月やあれは眞珠かたまり水

拙いけれど實境だ。進んで山の端に來た。目の前に遮るものが無いので、月と水とが宇宙に跋扈するのみ。松は黒く、枯木は凄く、漁舟もあれば、小島も見える。この凄絶なる冬の山水、何と評したら宜から

うか。また一句浮んだ、曰く、

　繪の浦や一筆かきの冬の月

これも亦實境だ。斯うして僕は月に浮かされて、夜の八時にもなつた頃、漸く熱海に着いた。宿には高山林齋兄も居つて、不意の襲撃を非常に喜び、先づ一盞と、草臥は酒と温泉とで忽ち癒り、翌朝枕を擡げて四邊を見れど、月も無ければ清興もなし。その日になつて前夜の事を追懐すれば、實に凄い程の風流さ。如何に景色が好ければとて、廂の邪魔になる鳥打帽子までも脱ぎ、そして車上寒月を樂しむとは、李白も一驚を吃するであらう。して見れば僕もマンザラの凡骨では無いと、高慢の鼻を天狗の栖む羽黒山近くまで持出して、それで祝辞に代へるとは、いよ〳〵以て凄い風流である。先づは風邪を感かぬでめでたい〳〵。

清風明月

いざや蝶に化して、あらゆる山容水態を趁はん。春は嵐山の花に戯れて、丈長に結べる京の娘の髪に憩ひ、夏は木曾の山奥に黄なる姿に變りて、木陰涼しき水の隈に眠る。秋の蝶の憐なるは、獨汝のみかは、森羅萬象、悉く凋み果てゝ、木枯の冬を泣く六尺ゆたかの大の男もあり。中に就て酔ふが如く醒むるが如く、榻々半生の夢を、花に載せ去るもの、實に汝の果報なり。我等人間、而も飯上に脚を粘するもの、嗚呼蝶にだも若かざるべけんや。こゝに我都門三尺を出でずして、この消夏の料を作る、慙死〳〵。

草より出でゝ草に入りし月の武藏野の頃はいざ知ず。權現樣御入府以來江戸の地頽りに開けて、今は萬家甍をならべ、黒雲一帶物干の上よ

り見ては、東京市中は恰度蒼龍の蟠るに似て、屋根は鱗の重なるが如く、八面玲瓏のお月様も、屋根より出でゝは、屋根に入る都の繁昌、桑田海と變る世の中に、これはまたもつけの幸ひなり。その武藏野の昔を思へとてや、夏の末秋の初めより虫賣の聲いと床し。大厦高樓に住む人は未だしもなれど、九尺二間の蒸暑き、家に住ひては、夕暮の風を撒水に冷す程の庭も無ければ、夕餐濟むや衢中をそゞろ歩きて、虫買ふて行く美人の袂に、涼風そよ〳〵とあやかりて、鈴虫纔虫の音優しく聞ゆる彼方に、母アちやん坊にもアレ買ふてとねだる子供あり、頼杏坪が詩に八百八街宵月明。秋風處々賣二蟲聲一。貴人不レ解籠間語。總是西郊風露情と、意味頗る興あり。

目黒池上なんどの田舍人、晝の家業を了へて緣側に足を踏み伸しつ、女房が勸むる白鳥の濁酒に一日の疲勞を忘れて、醉ふて謳ひ、醒めて

庭前の筵に寢轉び、澁團扇の風に飛び來る蚊を拂へども、藪蚊叢竹の隙より襲ひ來るに、こは敵はじと大鋸屑燻して桐の葉の蔭に澄む月を曇らし、車井戸より清き水を掬み干して、汗を消しては親父便々たる腹を叩き、狸の眞似して太平を謳ふ聲につれ、子もまた母の傍にごろりと寐轉びて、お月樣幾歳十三七つ、未だお歳し若いぞと唄ひ出せば、母は蚊遣火うち煽ぎながら、嬉しげに笑ふ一家の中の睦ましさ、都の人に見せてやりたし。

不忍池の柳の葉夕風にそよと吹かれて、上野の山を辷り出でたる明月に照らされつ、影を池上に映す姿は、美人の靜に立てる如く優しくもまた床しく、その葉に宿る露の玉、轉々と月下に滴りて、黃金をまろばすかと思はれたり。花は白く赤く夜目にもそれと水を出でゝ、貴妃の華清に浴するも斯くやらん、實に濁江に染まぬ氣質は、我國にては

高尾地獄の俤やあらむ。

草花の名所は向島新梅屋敷、坂本入谷、廣尾笑花園、龜井戸萩寺、根岸鶯花園等なり。先づ縁日植木屋の肩に秋を荷ひて來る花を、美人に比ぶれば、桔梗は紫式部の俤あり。苅萱は嵯峨野の奥にツンと澄せる小督局の月を招ぐ柳に強ねる姿あり。女郎花の優しげなるは被衣かぶれる女體に似て、足元のたわゝなるは、成福が打扮たる勾當內侍とも思はるゝめり。

僧敲月下門。鳥宿池邊樹とは絶代の名句なり。今や都門の紅塵を避けて、鎌倉に小田原に遁禪を修するもの、夜々前の如き清興あるべし。山に籠る者大抵は山寺に寓す、殊に鎌倉邊の諸寺多くは書生を賄ふて、本堂に肉食の香を句はすれば、阿彌陀佛鼻を摘んで遁げ塲を失ひ、誦經の聲歇む處、雲耶山耶の放吟となる。木魚響かず夜靜なる處、

清風簾搖いて、塔婆の影地に闇を作り、明月澄んで山氣清し。此時門を敲く者誰ぞ托鉢の僧なり、詩人これを見てア、善哉。

我庵は松原近く海遠く富士の高嶺を檐端にぞ見る、と歌に殘せし太田道灌邸宅の跡は、今草蓬々と生ひて虫の音切々たり。茶人は年々この處に月と虫とを賞して、昔時の利休は斯うでありしと、夜もすがら露に濡れて、秋風に身震ひする時は來れり。知らず今年も亦節を曳くべき茶人の風流ありや、否。

月瀨の春

年々に上野向島と同じ所の花見んも興なきわざなれば、今年は吉野初瀨の櫻狩こそよかんめれと、尾崎紅葉が發企に一味して、連判に加は

る面々には、西の京の住人巖谷漣を始めとし、江戸表にては江見水蔭中村花痩と予の四人なり。旅の用意もはや整ひたればいざやとて同、行四人、四月十二日の一番汽車にうち乘り、新橋の停車場を立出でぬ、國の名も武藏相模駿河遠江參河と遥かに、乘り詰めの長旅も厭きの來ぬこと妙なれ。噸ては雲の富士を車の廂に眺め、濱名の湖水を窓前に瞰して、見る間に雨そぼ〳〵と降り出でたり。雨になりてより一入哀れげに見らるゝは樋狹の古戰場ぞかし。古りたる松の樹の下に墓の物淋しく建ちあるさま抔、繪にしたらんには如何に趣あるべき。日暮るゝ頃尾州名古屋に着けば、車をはしらして富澤町の旅籠屋志那忠に泊る。翌朝は雨も疾く霽れて靑絹貼せし如き空に、汚點ほどの雲だに無ければ、一同喜び勇みて、京都なる巖谷漣の許へ柘植停車場にて落合ふべき電報を發し、車を熱田に急がしたり。名古屋の名物は名古屋帶に尾張大根は云ふも更なれど佛師の多きには驚きぬ。又車上にて弗と目につきしは兩替屋の目票なり。東京にては大抵分銅を看板にすれど此地にては寛永通寶の錢形を以てせり。

▲▲熱田の宮に詣でしに、近き中に御遷宮あるべしとて作事を取急き居る番匠はいづれも、裝束を着けたり。宮居は白木造りの質素を旨としたれば神代の古事も想ひ出でられてその尊さ云はん方なし。茅茨きらず柴檜けづらざるは聖代の德にして、儉の一字は實に國を興すの基礎なり。されば人にして若し奢侈に長ぜんか、その久しく榮えざるは火を睹るよりも明かなり。予今この宮に詣でしにあくまでも金碧を退けたる造り樣こそ搖ぎ無き國の要ぞと自ら頭の垂るゝ心地ぞする。社内あちこちと巡拜して海岸に出で、此處より勢州通ひの汽船に乘りて午

後一時頃四日市に着く。午餐喫べて汽車にうち乗り柘植驛に向ふ。途中關町に至れば名物の菓子關の戸〳〵と呼びて車の外を賣り歩く。關よりは山路なれば隧道も二つ三つあり。溪に架けたる鐵橋などありて、山の容水の色眺望頗る美くしく、關西の函嶺とも云ひつべし。柘植に着けば予等より前に巖谷漣畫工歌川國松と共に京都より來合はして二時間あまりを待詫びたり。先づ茶屋に打集りて一別以來の挨拶をなし、それより車を列ねて芭蕉翁が生地を尋ね、日闌くる頃伊賀上野へ着きぬ。宿を友生屋といふ、主人は風流の心得ある者と見えて翁が書ける色紙短冊など數種を秘藏せり。山家の馳走にはかゝるものこそよかんめれとて、予等が居間に懸けしを見るに、如何にも美事なるものなり。夜に入りて予は水蔭國松二子と共に夜芝居を見る、鄙びたるは一入の見物なりし。

十四日朝早くより宿を立出でゝ、城山に登り古城の趾をたづね、鍵屋の辻に至りて伊賀越復讐の古事を茶屋の老婆に問ひなどしつゝ、午後より大和の月の瀨に向ふ。四里許の道程なれど平地ならねば荷物を供なる男に負はせ名々身輕に打扮ちで悉く梅林なり。未だ其村に至らざるに、溪流に沿ふて進むに丘に據り水に臨んで香なほ衣衫に薰ず。渡し塲あれば向ふの岸に上りてなほ溪に沿ひ行くに見る限りの山は梅樹をもて充てり。想ふに春色三分の折には如何に美くしかりしならん。登ること七八町眺望頗る佳なる處鍋屋といふを宿として、各々日記などを認め了り、水色山光を集めて晩酌を試みし後、夢に羅浮仙に逢ふと見て一寢入に夜を明しぬ。

笠置山の今

十五日は月の瀬の宿を立出でゝ、桃が野、奥ケ原抔いふ小村を過ぎ柳生村にて午餐をしたゝめ、柳生山に登りて天の岩立神社の扉石と、柳生家の菩提所とを巡覽し、山駕籠を雇ひて笠置山へ向ひぬ。抑も此山は千有余年前、天武天皇其性御獵を好ませられ或時御幸し給へる折節、犢に勝れる大鹿の跳り出でゝ帝を追ひ參らせ、いとも危く見えしかば、帝は大に驚かせ給ひ一心に天に向ひて祈誓を凝らし給ひしに、不思議にも帝の御馬一躍して遂に虎口の難を免れ給へり。仍てその報恩に一の伽籃を建立なさんと思召し、御召の笠を此處に置きて後の標とし給ひけり。其後侍臣命を奉じてこの山に來り見るに、一羽の白鷺飛び起て笠の所在を示したり。即ち茲に巨大の岩に彌勒の佛像を彫刻して本

尊となし文珠藥師の兩巨石像を內に籠めて、廣大の伽藍を營み給ひ鹿驚山笠置寺と號せし由緣起等に見ゆ。斯かる靈境なれば予等も麓の路を分け入り登り〳〵て鷄の森といふに至れば、翠松徑を挾んで露滑かに、野草茫々として路迷はんとする。詩に曰ふ國亡びて山河在と詠みける意のそゞろに思ひあはされて、感慨の涙に胸塞がり今より思ひ奉るも畏れ多き事ながら、そも元弘のその昔後醍醐帝が花の都の御座所さへ、春の嵐の荒ければ月を辿りて內裏を遁れ出でさせられ、さしてゆく笠置の山に松吹く風を朝夕に耳にし給ひ、至尊の御身にある間敷き詫びしきさまに御在ませしを、北條勢はなほ執念くも附纏ひて此方へ軍勢さし向けたり。斯かれば昨日までは清淨無垢の七堂伽藍に松風の音讀經の聲のみなりし山澤も、俄に修羅の巷と變じて矢叫びの音凄まじく、遂には城も陷りたれは、帝は藤房卿と諸共にまた此山を落

させられ、只ある松原にかゝり給ひし時東は白みて夜は明たり。松の梢の長くさし出でゝ空に自然の廂をつくれば、帝は暫しと御足をとゞめ伐株に腰かけたまひて藤房を傍近く召させらる。藤房御前に畏れば帝は御涙に咽ばせ給ひて『さして行く笠置の山を出しより天が下には隠れ家もなし』と御歌遊ばしけるに、藤房感涙とゞめあへず『いかにせんたのむかげとて立よればなほ袖ぬらす松の下露』と一首の和歌を進らする中、忽ち空に聲ありて金色の鶏飛ひ來り帝を麓に導き奉つりぬ。鶏の森はその古跡なりといふ。今もなほ松古りて昔時の俤を殘す、笠置寺の邊小高き丘に毘沙門天の祠あり、これ楠正成の守本尊を祀れるなり。後醍醐帝の夢に楠子あるを知り給ひしも此處なりとか。行宮の趾には草生ひ茂りて宮柱の礎だもとゞめず、その廣さ三百餘歩、この山の最も高き處なり。元弘の昔時には如何なる宮居なり

けむ、御簾風に搖ぎて寒蜩柱に鳴くの外、皇天后土帝を守護する武士無く、夜雨蕭々たる折節は御座の間淋しかりしなるべし。魏々天を摩す彌勒岩の根に一基の卒塔婆建てり、こゝに元弘戰死の古忠臣を吊ふ。それよりまた迂曲せる徑を辿り行きて貝吹岩といふに登る、高さ十六尺斜に西に聳えて、その廣さ三十六尺、嘗て北條勢に攻め圍まれし時、帝の軍兵この岩上にて陣螺を吹き味方を指揮せし處なる由、岩上より四邊の景色に眼を配れば、連山屏風の如く峙つ中に、木津川の清流麓を縫うて白く、眞帆片帆の遠く鷗の遊ぶやうなるは淀に通ふ舟にやあらん。岩の下には二株三株の山櫻時知り顔に咲き誇りて、散り際脆き形を現はし眼前に沙羅双樹の盛りを見せぬ。この時案内する男遙か彼方の山陰に見ゆる一村を指して云ふ、彼をアスカ村と呼び侍るが、その往古元弘の戰に敵の軍勢を間道より導きて此山を陷れたるは、

同村に住みし桶屋の老婆なりとて、近村その不忠不義を憎み、今に至るも婚嫁を交へざるのみか、村人罪障深き故にや癩疾に罹る者多しと。賴山陽の詩に『居民爲レ我指二村墟一。當時導レ賊實由レ渠。至レ今猶不レ交二婚嫁一。覿面唾罵視二僕奴一』と嚮て山内を一周し了りて麓に下りぬ。

奈良の古都

散り敷く山櫻花に餞の句など考へつゝ、一同笠置の山を下り、麓の茶屋に憩ひて澁茶に咽喉をうるほし、こゝにて木津川を舟にて下るべき約束を取結び、輿丁に送られて川原に出れば、漫々たる長流、水瑠璃の如く青し。川向ひの村は南笠置にして家の數五六十もあらん、山坂形に建て連ねたる家の檐端の花や青木に立交りて、水村山郭いづれも畫中の物ならぬはなく、脆きは人の心とて景に遇ふては一同洒落も云はず、鹿爪らしく詩人を氣取る者あれば、圖にして見ま欲しなど立騒ぐもあり、頓て舟の準備整ひしとて船頭に促されて、我も〳〵と舟に乗り移る、屋島落ならねばさな急ぐべからずと頭立たる人の制するをも聽かず、得手勝手に舳の方に出で快哉〳〵と景色を賞めぬ、船頭は親子して帆を上ぐれば滿帆風を孕んで疾きこと矢の如く、兎角して舟は駒返し岩の邊に至る、此處は元弘の昔し、楠正成赤坂の城陷りたれば、君居ます笠置の山に至らんとて此ところまで來りしに、笠置も敵の攻むる所となりて炎煙天を焦し早くも落城なしたるにぞ、詮なく駒を引返したる處なりと云ひ傳ふ、それより古歌に名高き蟹野原を過ぎて、山城木津町に着く、白沙青松の間に一帶の長橋横はるは、蒼晏雲無きに何の龍ぞ、直に馬車に乗りて日暮奈良の古都に抵る。この

夜は御門町の魚屋といふに泊り、草臥たれば湯に入り按摩など呼びて宵の中より枕に就きぬ、座敷は主人が計らひにて猿澤の池に臨みし上段を與へたれば、寢ながら興福寺の五重の塔を眺め、水を度る大佛の鐘の音を聞きつゝ、宿の女中に土地の名所あるひは噂話など問ふに、關東とは事違ひて奇しき事ども多かりき、此地の遊女は襠姿なるを元林院といひ、素人風なるを木辻と云ふとぞ、俳人汝郡が記文に木辻の待宵、鳴川の別れ、情に萬金を盡し、思ひに一命を輕むず、とあれど見ねば知らず、翌十六日小雨降れば見物を見合して、一同宿屋の二階に洒落會といふを開きぬ、午後は霽れたれば打揃ひて春日の宮に詣でぬ、南都賦にあをによしならの都は御さふらい三笠山の麓なり、元明天皇和銅二年藤原の宮より此京に移さる、大宮殿、大佛殿、佛神をあがめて王法を輔け、若宮のやしろ、月日の宮、龍殿、尾上の宮、鏡の

神は橘の廣繼をまつり、浮雲の宮は鹿島立の始とす、氷室、卒川東大寺の八幡二月堂に若狹井あり三月堂四月堂云々其他の名所に至りては數へ盡し難し、芭蕉が句にも『奈良七重七堂伽籃八重櫻』と以てその盛なるを知るべし、一の鳥居を行けば無數の鹿ども右に左に纓綿ひて馴れ睦む樣の愛らしさ、一同興がりて糠煎餅に財布の底をはたき、雪消の澤に昔しを忍びて、二の鳥居より進めば若蒸せる春日燈籠は道の兩側を狹んで古色掬すべし、本社に詣で若宮にまゐり、巫女に神樂を奏さしめて神慮を鎭め奉る、それより若草山の麓に至り茶屋に憩ひて早蕨を肴に名物のあられ酒飲んでほろりと醉ひ、二月堂の階前に老婆の賣る葛餅を味ひ、東大寺の大鐘を三つまで撞きその響きの消えぬ間に大佛殿に入りて、種々の寶物を一覽し博覽會にて土產の品など買ひ取る程に、日も西山に傾けば急ぎ足に其處を立去りて、また一の

鳥居の邊に歸るに、折しも牧童が吹きすさむ一聲の短笛に、今まで野に伏し丘に臥したる男鹿女鹿のわれ遲れじと、構柵の中に馳せ入るさま、柔順にしてよく牧者と睦ましく、紅葉の秋には如何に興あるべきやと興福寺に入りて南圓堂、金堂等を巡覽し、日暮るゝ頃宿屋に歸る、歸へれば旅客室に滿てその繁昌云はん方なし、かの鄙歌にも奈良の旅籠屋三輪の茶屋二十日餘りに四十兩遣ひ果して二分殘るとあるを見れば宿屋は此處の名物にや、許六が旅の賦に旅店のさまを記す、『上段に書院床、劍菱のすかし、火のなき火燵にやぐらかけて、門口の入湯桶、かたふけて据たり、底に小砂のさはるは、夜べの殘りかいぶかし、出女のたて島は春秋をしらず、根太板敷は落て隅々まで疊とどかず、天井襖は雨もりにきはづき、鐵行燈はくらく、紙はわらんべの心といふ事に燃たり、錢賣、草鞋賣にせがまれ、やう〳〵に枕をかたぶけ心よき寢入ばなは、馬さしの聲に夢を破る、出立は七つといひふくめるに、旅人も亭主もよく寢て、夜のあけてふためくつらもにくし』と、寔に其實境を寫したりといふべし。

法隆寺と初瀬

青丹よし奈良の都に二日逗留して、大佛の鐘に諸行無常を悟り、猿澤池の八重櫻の花の色に盛者必衰の理を鑑み、詩情を肥し、旅の草臥を癒して、十七日の午前十二時法隆寺に至れり、汽車を下りて一同野道を辿るに空朗々と晴れ渡りて心地よき風の頬を撫でゝは、何處よりか花の香を送り來て菜の花に蝶の狂ふも面白く、途中も飴賣などに戲れて歩く程に、巖谷漣はいたく打興じつゝ「草鞋から蝶々踏み出す野

路かな」と一句を口吟めば、江見水蔭手を拍てそは秀逸なりと賞めぬ、十町餘ある路筋を苦もなく歩して法隆寺の裏門前なる加世屋といふに中食を喫ため、案内者を雇ふて境内殘り無く見物するに、七堂伽藍なほ昔時の儘に存りて夢殿、舍利殿を始めとし金堂に入りて、曇徵が壁繪に驚き、五重塔に進みては塑造の須彌山に魂を銷す、人は唯新造が三味線のみに魂を消すものと思ひしに、今此境に入りてよりは神澄み氣爽にして極樂の淨土に拔苦娛樂するが如し、峯の藥師堂に詣れば、小高き丘とて景色一入美くしく、遙に金剛、葛城の諸山霞の笠を脫ぎ捨て足踏み伸せるが如き連脈は、一帶に紫嵐の色を凝して眼も文に、麓の村々の杉の木立に交るに床し、堂に入りて參拜し、思ひの儘に見物して、急き宿に歸り、車を馳て初瀨に向ふ、途中田原本の町を過れば、畝傍山右手に見ゆ車上ながらも遙拜し奉りて天長無窮を祈り、三

輪に入りて明神前の茶屋に憩ひ、車夫の案內につれて明神の境內に詣るに、森々たる杉の木立茂り合ひて神寂びたる社なり、夫より二里の間を四十分ばかりに急がせ、車の初瀨へ着きたるは入相の鐘の聲山をめぐりて長谷寺の長廊下に散る花のざはつく頃なりし、初瀨の宿を井谷屋といふ、夜にいりて江見水蔭中村花瘦二子と共に長谷寺に登る、樓門より本堂まで一町に餘れる石壇は廻廊屈曲して頗る壯觀なり、壇の左右に牡丹多し、舞臺に上るに初瀨の町は悉く眼界に落て景色雄大なり、翌朝衆と共に再び此山に登りて瓦の寄進に我が名を留め、內陣に入りて十一面觀世音を拜す、見物を畢りて一同多武峯に向ふ、尾崎紅葉獨り脚疾あるにより車を驅つて壺坂を越え吉野山に急げり。

多武峰

殘れる面々は櫻井の町外より車を下り、多武峯に登るに、麓の石の華表より談峯神社まで五十餘町あれど、路左程に嶮ならず、一町毎に標石ありて一々路程を刻めり、抑談峯神社は大織冠鎌足朝臣を祀れるなり、其蜩翁草に和州多武峯は鎌足公入鹿を討んと欲するとき帝と此山にいつて談合し給ふ、故に此山を談ひ山といふ、鎌足をまつりて談山權現といふ、談と多武と聲通ず、また入鹿を討て武功多しといふ意にて多武峯といふかと見ゆ、境内清淨にして楓樹多く、氣候頗る寒し、社殿悉く丹を以て塗り、青山に朱を點ずるが故に景色一段なるを覺ゆ、先づ社務所に至り神樂を所望せしに、十二三歳許の神女二人出で、神前に舞を奏し神慮を鎭め奉りぬ、畢つて寶物を一覽し、天竺の華羅

といふ樹を眺め、名に高き十三塔を見物して、花中宿といふに中食を喫す、想ふに此地春季に登山せんよりは却て秋こそ優るべし、蓋し紅葉滿山に二月の花よりも紅なるべければなり、此處にて四人結束し村の男一人を雇ひて銘々の荷を負はせ、上市町へと急ぐに、山漸く嶮しうして溪水迴かなり、諸鳥梢に啼き渡りて耳を洗ひ、烟樹雲を吐いて眼爽かなりといへども、路の嶮なるに若かず、一同汗を絞り嘆息を洩らして纔に山頂に登り、一軒茶屋に澁茶を啜りて渇を癒し、こゝに再び勇を鼓して上市に出でたり、吉野川滔々と流れ、兩岸を挾んで妹脊山峙ちぬ、されども山櫻の一木だに無くて青葉のみ茂れるは、芝居で見る書割とは大に違ふと一同不平を云ひたり、此日舊曆の三月三日に當り桃の節句なればとて上市の川原に素人相撲あり、鄙の質朴なる、繪にして見たかりし、櫻の渡場を渡り尙ほ行く五十町、吉野山に

ぞさしかゝりぬ。

吉野の花

日は西の山に、落ちかゝりて花の下道辿りけるに、兩側の櫻は梢を交へて天繊るが如く、一帶の白雲凝つて更に動かぬに、寒からぬ雪のひら〳〵と散りて塵に汚れし草鞋を撲てど消えもせず流れもあへず、餘香は衣に薫じて蝶の行く春を惜むも床し、夕陽のやゝ沈みかゝりて千葩万葩を照すにつれ、花の光るかと疑はれて長途の疲れも忘れたり、此處を何處と名に呼ぶにやと案内顔する水蔭に問へば、渠は寫生せんとして下したる筆を止め、一目千本とは此處なり、貞室がこれは〳〵、知紀が霞の奥は知らねどもと、口吟みたるも此處の事を詠みたるなりと、

一同喜び勇みて大橋を渡り金の鳥居を入りて、佐古屋に至れば、紅葉早くも此處に着きて二時間餘も待詫びたりといふ、湯に浴りて寐轉び、歴史文學の話などして寢に就きぬ、翌朝宿を出でゝ先づ邊近き藏王堂より吉水神社へ參詣しぬ、此處には延元帝の玉座の間源廷尉が閑居の跡、其他南朝代々の遺物等種々あれば、請ふて拜觀するに、いづれも懐舊の涙を落さしめざるものなく、至尊の御身の斯かるいぶせき宮居に詫びしくお在まして、落花珠簾を撲ち、春風御苑に度るの外御目を慰さめ奉つるものもなく、僧は敲く月下の門てふ詩中に在るが如き御住居まし〳〵たる、當時の御心や如何なりけん、今にして遠き昔日を思ひ見るも恐れ多きとなりけり、夫より岨路に沿ふて如意輪堂に詣で、延元帝の御陵を拜し奉るに、荒れたる昔時の俤は無くて、石階塵無く、陵上苔青し、落花深き處に南朝を說きたる眉雪の老僧は見えざ

れども、掃除行届きて箒の痕波の形を印す、御陵の下に小楠公の髻塚あり、芳名石に銘して永く朽ちず、一同參拜し畢りて、竹林院といふに行くに豫て宿に吩咐け置きたる旅當を厨の兩掛にして持て來るに逢ひぬ、紅葉は山駕籠に搖られて花を仰いで眺め、厨は瓢簞と緋毛氈を肩にして附添ひ行き、櫻の間を潜る樣は師宣が遊山の圖にも似たり、後より續く一同は脇指さゝぬ元祿奴の脚胖掛けたるも可笑し、寺に着けば、青草の上に毛氈を敷き、山海の珍味を堆き迄陳べ列ねて且つ呑み且つ食ひ、藏王堂の森を遙に見渡せば、朱塗の伽籃高く聳えて、青綠の山、後をめぐり、釋迦ケ嶽、東に峙ちて、雲半嶺を徘徊す、二株三株の山櫻は彼方の溪間、向ふの峯に今を盛りと咲き亂れて、去年に變らぬ色を見せたり、變らぬは實に山水の形なれど、變り果てゝや吳王宮中人去り盡し、年々の春色誰が爲に來るとは、此山を評するの

語乎、頓て酒も醉はぬ程に飮みて杯盤を供の厨に取收めさせ、宿に歸りて直に結束し、一同下市へ急ぎぬ、途中村上義光の墓に詣で、官幣吉野宮の宮司を訪ひて、山を下るに日和好ければ、花見の男女の打つどひて來る樣の興ある、昔時は靜路の嶮なるに艱みて去りにし人の行衛を追ひかね、今は小娘の花見に山路を辿るも可笑し、兎角して下市に着けば、車を驅つて高田停車場へ急がす、吉野川を渡り、車坂を踰え、戶毛、御所町を過ぎて、十九日午後二時半頃高田に着す、三時半汽車に乘りて、大和を出で、河內に入り、津の國浪華に着きたるは五時頃なり、港町の停車場より、大坂の町を腕車にて橫切り、梅田より又汽車にて京都に乘込みたるは夜の八時過なるべし、こゝには巖谷漣の家に七日餘逗留して、名所舊跡を探り、花を見、月に浮かれ、鴨河の水に旅の垢を流して、嵐山の晩霞を吸ひ、都踊りに魂を奪はれ、壬

生狂言に腹を抱へて、文學家懇親會といふに臨み、京、大坂、神戸なんどの歴々諸士の厚遇を辱ふして、酔て一同祇園町といふ名高き處を見物せしに、紅葉取あへず「春の夜や化物までも美くしき」といふ奇警の句を吐て、厚化粧の鬼の恐べきを諷したれば、予は無雅の人の長く止るべき場所ならざるを悟り、其月下旬歸宅したり。穴賢。

瞥見東海道

雪は鵞毛に似て飛んで散亂すれども、軍鷄屋だに起き出でたる家は無く、人は外套を着て立て徘徊すれども、辻待の車夫すら提灯を股にはさみて、緋毛布にくるまるを見ても、寒さの程は知られたり、イザさらば雪見に轉ぶところまでと、芭蕉が句の上では如何にも風流に聞ゆれど、雪の朝の一番汽車に乘らんとて、夜明けぬ前に家を出でゝ、停車場に駈けつくるほど、無雅なるものはなし、漸う西京行の一番に間に合ひ、慌てゝ乘り移れば、早くも新橋を發車したり、相州藤澤を過ぐるに、雪は全く霽れて、空は青絹を奠せるが如し、箱根に入れば天寒く、雲低く峰より颪す山風は、樹々に積れる粉雲を捲き上げ、紛々として窓を打てども、景色の面白さに、寒さを忘れて頸を外の方に出すに、皚々たる雪は谿を埋め、山を裝ひて、絹張山の俤をうつし、水は碧潭に螺巻き岩に砕けて滔々たり、危橋あり、渡る者は漁翁なるか、荒村あり、嵐の爲めに竹の籬を荒されて、酒賣る家の旗も無し、その奇扱なる山色、その雄壯なる水光、我の畫師ならざるを憾みとするのみ、清見潟に至れば海波穏にして其色瑠璃を凝らし、富士の峯半面の影を落して、白きこと鶴に似たり、三保の松原は遠く晩翠を凝らして、

美人の帶かと怪しまる、午後三州豐橋に至れば、汽車例刻より遲るゝこと一時間、名古屋に至りてまた遲るゝこと更に二時間半、夜に入りて風寒く、乘客十分の九を減ぜり、燈暗ければ微に傍人の眉目を辨ずるのみ、その顏色灰黃を帶びて心地惡しきこと甚だし、岐阜大垣を過ぐるに倘ほ遲るゝこと一時間、今は一室の中に予一人を殘すのみ、その心細さ云はん方無きに、地は關ケ原に入りて古戰場の跡轉た物悲しく、星火の點々として野外をめぐれるを、鬼火の明滅たるにやなど思ひ及ぼし、何となく不快を感じぬ、夜は二時に近くして漸く江州馬場に着きたり、車掌は窓の戸を叩きて、こゝにてもなほ遲るべしといふ、予は到底耐えきれずなりたれば、車を飛び下りるに、何時の間にか積りしやら、雪は木履の齒を埋めぬ、急ぎ停車場を出でゝ旅店に入り、泊らんことを請へば、客來多くして明間無しと斷る、腹は立てども詮術無ければ、車夫の立場に入り呼び起せど熟として聲あらず、漸う一人の老夫を認め、大津まで行けと云ふに、お金次第なりと答ふ、足元を覗ふなど思へども、外に方略もあらざれば、云ふが儘に賃銀を與へ、大津町に入り中村屋といふに泊り、凍えたれば火にあたり、粥をもて暖をとり、寢に就きぬ。

雪の三井寺

翌朝早起三井寺に登る、門を入りてそゞろ歩けば、兩側の並木に雪の積れるさま面白く、觀音堂の廣庭は、一面に白布を敷きて、烏の飛んで墨を塗るあり、辨慶の釣鐘を見了り、頂上に登りて茶屋の床几に腰うちかけ、力餅食べて澁茶を啜りながら、八景を見渡せば、比良山は

雲に隱れ、浮見堂は迥かなり、唐崎の松眞綿につゝまりて高砂の嫗かと疑はれ、石山の伽籃は霞を隔てゝ見えわたりぬ、大津の町は碁盤の如く、疏水の舟は將棊を列ねたるが如し、その勝景畫も及び難し、古人瀟湘八景に擬へたるも宜なり、山を下りて疏水會社に至り、切符を買ふて舟に移る、舟は二十八人を容るべし、膝と膝と相接近して、席に立錐の餘地無し、菓子賣去り飴賣來る、恰も淀河のクラワンカ舟に似たり、舟子二人櫓を押して進み、第一の關門に至れば、舟中提灯を點せり、窓を開きて構造を見るに、天地共に煉瓦をもて疊み、水勢頗る早し、門を出づれば景色一變し、山秀で樹木茂りて、風光明媚なり、舟中には僧俗語を交へて、紅を品し翠を評し、やゝ土地の風俗を探知するを得たり。

西京めぐり

頓て舟は蹴上に着きたれば、岸に上り車を飛ばして三條の旅店に憩ひ、直に友人巖谷漣を訪ふ、夜に入り報知社員遲塚麗水氏も來りて、予が來遊を悦びたり、こゝに會する七人、いづれも文學美術家中の錚々たるものなり、微醉の後一同京極に抵りて仁輪賀を見る、馬鹿八の滑聲諧謔、獨特の絶技といふべし、

馬鹿八の仁和賀も珍らしき中が見頃と、匆々にして木戸を立出で、京極通りをそゞろ歩けば、京は流石に佛寺の多きところとて、圓頂黑衣の僧ども、香水の匂ひに浮かれ出でたるか、剃立ての天窓を惜氣もなく、兩側の洋燈に照らされながら、女芝居の看板に見惚るゝも可笑しく、髮を竹長とやらに結ひたる下婢の、尻切り半纏にゆもじほどなる

前垂を懸け、岡持下げて豆腐屋に通ふ姿の古風なるは、妹背山の狂言めいて面白しと、無性に嬉しがるを、漣はお上り奴と罵りぬ、夜もはや九時を過ぎぬ、更けなば道の程も淋しからむと、麗水先づ別れ歸らんと云ひ出せば、我も〳〵と連立ち行く人々は、花本宗匠、漣、松華、松僊の諸氏なり、予が宿は三條なれば木屋町の歌川宮島二子と共に、尚ほ名所の寫眞など買はんとて、其處此處を駈けめぐり、夜風の冷たきに身震ひし縮み上れば、歌川子は久々にて一献酌まばやと、四條の千もとに至る、家は鴨川に臨み、窓外の眺望一入美し、向ふ岸の燈影水に流るゝ景色を眺めつゝ、よき程に酒も過して、いざとばかり家に歸れば、雪ちら〳〵と降り來りて、黒き外套も霜ふり羅紗と見ゆるまでになりぬ。

宵より降りたる雪は翌朝にいたりて霽れ、三條四條の眺めいと麗はし

く、布團着て寢たる姿の東山は、寒さに起きも得やらぬ風情見ゆれど、予は右に大なる用事を抱えて、雪見と洒落らるべき身ならねば、疾く家を出でゝ谷鐵臣翁竹村藤兵衛氏を訪ひ、正午過ぐる頃歸るに、歌川子は寫眞機械を弟子なる人に持たせ來りて、いざこれより圓山へ行かんといふ、そはいと興ある戲れなりと、蒼皇しく身仕度して大橋のたもとに行けば、宮島子は微笑みながら、我等の來るを待てり、車雇ふて祇園の社まで駈けさせ、それより徒歩にて圓山に上りぬ、也阿彌の坂を横切り、東大谷に出、こゝにて納骨堂を寫生せんとて、歌川子は松の根に腰うちかけて圖取りに餘念無き襟首へ、松の露はら〳〵と落ちて、襦袢の襟を浸せば子は驚きてグッと梢を睨みしは、鶴の來て休み居しにはあらぬかとの心遣ひなり、漸々にして圖を取り康賴の墓に詣で〳〵、應擧紀念碑の建つべき邊の寫眞も濟まし、西行庵を音信たり、

門の戸をほと〳〵と叩けば、庵主小文和尚、看經の聲をやめて、障子細目に外の方を見やり給ふ、予は疎なる垣根に伸び上りて、彼方を窺へば鼠木綿の綿入に、茶紬の腰衣をつけたる四十路あまりの僧おはします、落飾の痕翠々として、いと優しげに、此方を向きて、いづれも内におらせ給へと呼び給ふ、宮島子先づ入りて西行庵に詣でたき旨を請へば、和尚は出でゝ案内せらる、庵は弐間四面もあるべし、蘿菅屋根は雨に黒みて、楹には青き苔のまとへり、板縁は寂びて昔時の俤を殘し、厨子は古くして轉た斷腸の思ひ深かり、庭には二株三株の梅樹あれど、かたく雪に封じられて春の氣色だに見えず、其奥の方には芭蕉堂の荒れたる儘に淋しく殘りて、枯れ枝に鴉の留れるさまは秋の暮にも似たり、和尚は香を焚き花を供じて厨子の前に勤行あり、薄暮辭して家に歸る。

此夜木屋町の生簀に飲む、酔ひて歌川子の家を訪ひ、漣山人と共に市中を散歩す、これ年越前夜の風俗を見んがためなり、聞說く京都の俗、節分の日には市人の女子、未だ破瓜の年にいたらざる者も、みな髪を丸髷に結ひて、夫あるの風を裝ふと、其何故なるを知らざりしに、今年はじめて實際を探り、其風習の奇なるに驚きぬ。

三日の朝はとく起き出でゝ、宿屋の女中の髪容を見るに、十三四より十六七才までは肩上げのあるも無きも、みな一樣に丸髷に結ひて、緋鹿の子の根掛をかけぬ、朝餉の給仕に出で來れるに、何故髪を丸髷に結ひ給ふかと聞けば、その女年の頃は十三四なるべし、愛らしき顔して、こは早く花嫁になる呪なりと答ふ、町家の娘ばかりかと問ふに、いな市内各所の遊廓にては、遊び女唄ひ女などがお化とて、若きは老たるに、また老たるは若きに粧ひ、平生に似氣なき髪をば結せて、諸